

極樂通信

# UBUD



vol.8



*photo: Y. Hori*

バリで必ずお目にかかるものとして供え物がある。供え物には様々な種類があり、各種の儀礼や祭事にはかかせないものでもある。毎日家庭でかさず供えられるサイバン（Saiban）と呼ばれる小さな供え物は、バナナの葉などに乗せられたご飯や植物などで飾られたものだが、これを見ただけでもバリの人々の宗教思想が感じられる。

サイバンは日によって意味のある違った供え物を作り、家の中のたくさんの要所に線香と花びらの聖水で清めながら供えられる。バリの人々はこの一生続く作業に見られるように、大自然から授かったいろいろなものに感謝しながら供え物をし、ゆったりとした自然循環の中で生きている。Baliという言葉はサンスクリットで「供え物」を意味している。そしてバリという島そのものが神への捧げものであるともいう。はたして我々は大自然に感謝しながら生きているであろうか？

ꦧꦶꦸꦢꦸꦢ

Vol. 8 1995 April

# Contents

## ●人物紹介

Anak Agung Gede Ariawan----- 4

## ●Kabar Baru Berita Lama

懐かしのセゴール----- 7

バリでバイクに乗ろう！----- 8

## ●C・O・L・U・M・N

Bali, 自由を求めて-----10

TATTO (刺青) はやっぱり痛かった-----12

## ●Enak・Enak・Ubudおいしいものに目がない

断食中の商いはつらいよ…-----14

## ●ひみつシリーズ< 1 >

Legong のひみつ-----16

## ●UBUD よろず百科

BANGLI は今日も雨だった-----19

## ●Ubud Buku Catatan Harian

うぶどう日記【3】-----22

## ●BUKU-BUKU 紹介

アキオ紀行-----27

## ●Pelajaran Bintang

バリ島・星空散歩道【6】-----28

## ●Belajar Tari&Gamelan -7-

ファイト一発！ バリ舞踏-----32

## ●Apa itu?

これ なあ〜んだ？-----33

## ●Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUD の環境を考える／洗剤-----33

## ●Toko BEST 店

INI=ITU gallery-----34

## ●Warung 味な店

SOTO AYAM SURABAYA-----34

## ●Pondok Manis 私の常宿

Amandari-----35

●Pesanan & Kesan 旅人一声-----35

●その他のニュース-----36

●ウブッな人々-----37

●Studio スタジオ-----38

●Pengumuman 伝言板-----38



## ○表紙のことば○

大西 有紀／Apriani  
1970 年生まれ 京都出身

自然の中には あまりに多くの表情やエネルギーが隠されている。

その事に圧倒され、それを自分の感じたままに絵に表現しました。

驚くべき力や底知れぬ心が、見えないけれど感じる。

その力や心を感じることが出来、解け合う事が出来た時、その瞬間を何よりも大切に、絵に表現していけばと考えています。

そして、作品を見て少しでも多くの人に少しの間でも時間を止めて「全く違う世界」を感じてもらえればと思います。

(Apriani)

1995.Apr.4

## 編集室便り

### ●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

☐ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)

☐ Dos フォーマット (2DD-720KB / 2HD-1.44MB) の FD (Text Data)

☐ Nifty-Serve の Mail

(宛先 ID/ MHC03202: 菅原 or GCB01162: 堀)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

# Anak Agung Gede Ariawan



アナッ・アグン・グデ・アリアワン、1964年生まれ、通称オデ。UBUDの中心、集会所のななめ向い、メインストリートのいちばんにぎやかな場所にある、レストラン・Ary'sのオーナーである。ブラウンカラーのインテリアで統一された彼のレストランは、ひときわシックでよく目立つ。料理も評判で、今ではUBUDでトップを争うほどの人気だ。彼はAry'sのオーナーであるばかりでなく、各方面でたいへんバイタリティーあふれる活躍をしている、ヤング・エグゼクティブのひとりなのである。彼のAry'sのオーナーとしての顔と、UBUDの名士のひとりとしての顔、そのふたつのポイントから語ってもらった。

**極楽通信インタビュー（以後極通）：**まず、オデさんの簡単な経歴を教えてください。

**オデ：**えっと、何から話そうかな？まず、僕はジャカルタで生まれた。父の仕事の関係だったのだけど、家族いっしょにUBUDに帰ってきたのは僕が10才になってからだった。

その頃のUBUD？まだまだ田舎だったよ。外国人といえは数人のヒッピーと、文化人類学者、それにわずかなアーティストくらいのもので、いわゆる観光客はほとんどいなかったなあ。その時あった外国人向けのレストランや店は3〜4軒<sup>1</sup>だった。

僕が高校生になったあたりから、少しずつツーリストが増えはじめたよ。その頃はまだ家が貧しくてね、学校の休みを利用して僕もお金をかせぎはじめたんだ。ツーリスト向けにNews Weeks誌をデンパサールで仕入れてここで売ったり、両親が焼いたココナッツ・パイを他のレストランに買ってもらったり。高校を卒業してからは、ヌサ・ドゥアにある国立の

ツーリズム専門学校<sup>2</sup>に通った。

**極通：**なぜツーリズムの学校に？オデさんはその頃すでにバリの観光ブームを予測していたのですか？

**オデ：**いや、そういうわけじゃなくて、ほんとうはアーティストか建築家になりたかったんだけど、父に反対されて…。それにその専門学校は費用が安かったんだよ。でも入学試験がとても難しくてね。試験とそれに授業がほとんど英語なんだ。運よく合格したものの、ついていくのがたいへんだった。だって1日7時間フルに授業があるんだよ。そのおかげでいろんなことが学べたけどね。

**極通：**レストランを始めたのはいつ頃からでしたか？

**オデ：**その学校にまだ在学中の時だったよ。仲のよかった友人を7人集めてジョイントしたんだ。その



時のメンバーは今、みんな外国にいるよ。

それで学校を1年で終えて、ジャカルタのプレジデント・ホテルに研修に行くつもりだったんだけど、ちょうどその時、アメリカのクルーズ船の仕事<sup>3</sup>にさそわれたんだ。Around the world クルーズ、つまり世界一周豪華客船の旅だね。レストランは母にまかせて僕は船上の人となったわけさ。いやあ、その仕事はきつかったよ。24時間のシフト制でね。…で、まず、ウェ이터を4ヶ月、そしてソムリエを8ヶ月、そのあと会計事務のアシスタント・コントローラーとして3年。仕事はおもしろかったけど、僕がインドネシア人だからという理由で昇格も何もしてくれなかったの、やめてしまった。その仕事の時の経験が、今になってずいぶん役立っているよ。経営の収支とか、商品やストックの管理とか、すべてコンピュータでコントロールするんだ。実は最近、ここ（Ary's）でもそれをやりはじめてね、ほら、（…と、キャッシャーにあるコンピュータの画面を指差す）スタッフもようやく使いこなせるようになったよ。

**極通：**コンピュータですかあ…、すごいですねえ…。

**オデ：**うん。それからはがんばったよ。何を始めるにも資本が必要でしょう？そこで兄とふたりで考えて、まず、資本が少なくてすむポスト・オフィス・エージェント、シッピング（カーゴの代理店）、マネーチェンジャーから始めて、今の、となりのツーリスト・オフィスをつくったんだ。レストランの方もメニューのチョイスから、試作を重ねて吟味して、今でも毎年、インテリアとメニューは再検討することにしてる。どんどん時代は変化していくからね。ついていかなくちゃ。僕のレストランには、コンセプトがあるんだ。それはカルチャー、ネイチャー、ヘルシー、この3つ。これを提案していくことによって、not just restaurant、（と、彼はとてもきれいな英語を発音した）つまり、ただのレストランじゃなくて、何かをアピールしたいんだ。たとえば店のB・G・Mは不変のもの、そう、エスニック・ミュージックやクラシックをかけるようにしているし、インテリアも自然のものをを使う。そして、コストが高くつくけど、ロー・コレステロールのサラダオイルを料理に使うとか、とにかくいつもいいクオリティのものを提供していきたいね。そして、やっぱり食器を洗う洗剤や、汚水の処理にも気をつけてる。（こ

れもコストが非常に高いのだけど…”と言いながら見せてくれた食器用洗剤は、Earth Shield - 地球を保護する - という商品名の泡のたたないものだった。）

**極通：**そうそう、オデさんは以前、外国人も交えた“Ubud clean キャンペーン”にも参加して、ゴミ集めなんかもしていましたね。いかがですか？移りゆく UBUD を見てきて、どんなことを思いますか？

**オデ：**う～ん、…簡単に一言では言い表わせないね。観光化に関することはとても難しいよ。まず言えることは、UBUD の場合は、ヌサ・ドゥアの開発と違って、まだラッキーだったと思う。あまりに大きな資本が外から急に入り込んだら UBUD はパニックだったろう。でも、とてもペースがゆっくりだけれども、確実に UBUD も変わってる。まず、土地の値段が上がった。土地が高くなればそれにかかる税金も高くなるだろう？つつましく農業を営んでいた人の土地も、まわりの土地にあわせて税金がどんどん高くなっていく。あげくに、その税金が払えずに土地を売ってしまう。それをまた高い値段で買う人がいる。パサールの野菜ひとつだってそうさ。われわれレストランの経営者は、少々それが高くなったって買うよ。それがまたお客さんに売れるんだからね。でも、一般の家庭の主婦は？ …考え始めるとキリがないよ。

**極通：**観光化による弊害も含めて、オデさんは環境保護に関する団体でも活躍していると伺ってますが。

**オデ：**いやいや、まだまだ。UBUD には yayasan Bina Wisata という協会があって、昔からツーリスト・インフォメーションで有名なあれさ、僕はその最年少の協会員なんだけどね、この協会は UBUD のローカル・ガバメント（役場のことか？）よりも力を持っているんだ。UBUD にふさわしくない建物のチェックだとかもできるんだけど…、（ここで声を小さくして）協会のほとんどが公務員の石頭でね、なかなか新しい試みも、ままならない状況なんだ。たとえばゴミに関して村の条例をもっときびくしようとか、そういう大切なことも遅れてる。やらなきゃいけないことはいっぱいあるのに。僕はもうひとつ、サヌールに本拠値を置く、yayasan Wisnu という協会にも参加してる。これはけっこう

力のある団体で、生活環境問題とか、リサイクル運動なんかに積極的に取り組んでいるんだ。2～3年前、ギャニアル県長が、“街路樹を切り倒せ”っていうわけのわからない命令を出したことがあったでしょう？あれも、すぐに Wisnu 協会から直接ジャカルタの中央政府に異議を申し立てて、そこからギャニアルに通達されて、「はい、前言撤回～！」ってことになったんだよ。

その他にもゴミの処理場や処理方法なんかのリサーチもしてるんだけど、この協会はあまりにも進歩的なんで、逆に地方政府からにらまれちゃったりするんだ。難しいね。

**極通：**う～ん、そうですかあ……。では、環境以外のことでは？

**オデ：**文化ねえ……。うん、UBUD は芸術の村だって言われてるよね。そして村人はほとんどアーティストだって。それは間違いではないけれども……（と、少し考えて）ねえ、今、UBUD に本当にピュアなアートってあるんだろうか？ ギャラリー？ レゴダンス？ それってみんなツーリストの為のものでしょう？それが純粋なアートだろうか？僕はおおに疑問に思うよ。今の UBUD のアート状況って、まるでスーパーマーケットみたいだ。そんなの芸術じゃない。言ってる意味わかるかな？ほんとうに村人が自分達のために作りだしてるアートって少ないよ。ルドルフ・ボネやレンパッドなんかについての知識なんて、村の誰が知ってる？ツーリストの方が詳しいじゃないか。僕たちは何か大切なことを忘れてしまっているんだよ、きっと。だからといってどうすればいい？僕がひとりで考えたってどうにもならないんだけどね。

**極通：**オデさんのように現実をシビアに見つめている人はまだまだ少ないのでしょうか？

**オデ：**いや……。この現状がわかっている人も増えてきていると思う。さっき話した環境のこともそうだし、僕たち自身の文化のことも……。UBUD の観光開発はペースが遅くてまだラッキーだったって前に言ったよね、そうなんだ。今なら大切なことが手遅れにならずにすむかもしれない。でも、このままあと 10 年たったら、たぶん修復不可能だろう。貧乏で食べることにしか考えられなかった僕たちが、今、やっとうこうやっていろんな問題を考えられるように

なったんだ。まず、僕たちから始めないと。つくづくそう思うよ。

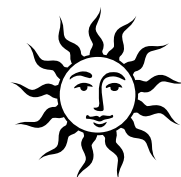
UBUD のメインストリートの中心にあって、UBUD の変わりようがそのまま目に入ってくる場所に、彼はいる。

特にこの 4～5 年のめまぐるしさは、彼の目にどう写ったのだろうか？

経営してるレストランでは、時代を先取りするセンスを発揮し、コンピュータまで使った管理を試みるという進歩派である一方、ツーリズムによって変化していく環境をきびしい目で見つめるクールな思慮深さを持つオデ。

このインタビューでは、なんとなくきまじめで固い人を想像してしまいがちだが、実はマウンテンバイク<sup>4</sup>だの、バドミントンだの、忙しい時間をさいてエンジョイする気さくなヤング・エグゼクティブのお兄さんなのだ。彼の話しぶりはとても知的でおだやかなのに、語ってくれた内容はとても HOT なものだった。

こころよくインタビューに応じてくれた彼に感謝するとともに、彼の、そして私たちの UBUD がよりよいかたちで育っていくことを願ってやまない。



## 注釈

1. UBUD にいちばん最初にあったのは、JL. モンキー・フォレストにチャンドリ、オカワティ、アユズ・キッチン、そしてチャンプアンにムルニーだった。
2. BALAI PENYULUHAN LATIHAN PARIWISATA、略して B.P.L.P.。いわゆるホテル・観光訓練学校。通学するにもネクタイをしなければならぬほど厳しいことでも有名。
3. なぜか BALI の男達はこの仕事につけるチャンスが多いらしい。アメリカやオーストラリア籍の客船で、ワンクルーズが数ヶ月にも及ぶ。この仕事を数年続けて帰ってきて、自分でレストランを始める男達もめずらしくない。
4. アグン・ライ・ギャラリーのアグン・ライ氏、ミスター・BALI のオーナーら地元の著名人たちと UBUD Mountain Bike Club なるものを結成。U.M.B.C. のロゴ入り T シャツは、ここでひとつのステイタス・シンボルにもなっている。

## 懐かしのセゴール

### グダン・ガラムしか吸えない女

セゴール、そう、Ubudのナイトマーケットは、私にとって社交の場であった。あらゆる人たちとのコミュニケーションの場、そして毎晩行かずにはいられない、常連が集まる唯一の場所であったのだ。

なんのことはない、毎晩同じような安い料理を食べながら、くだらないことをおしゃべりする、言ってしまうとそれだけなのだが、なにぶん長期の滞在の面々は横のつながりでもってゴシップじみたウワサ話に花を咲かせたり、新顔のツーリストのユニークなアジア紀行のようすを聞いたりすることで、あまり変化のない日常の中のひとつの刺激とするところであった。

日がとっぷりと暮れた8時～9時頃が、その常連の集まってくる時間帯だった。時には激しいスコールが降ったり、身体の具合が悪かったりして、ある夜そこに行かなかったとしよう。翌晩、顔を出すと「昨夜は何をしていた」「いいレストランで食べたのか」「さてはPacar（恋人）ができたな」などと質問責めにあう。たった一晚、欠席(?)しただけで。だ。つまり私達には妙な連帯感があったように思う。今思えば強烈な個性を持った人たちばかりだった。日本では絶対に一堂に会することのないはずの、それぞれ年齢、経歴、価値観を持った人々が、せまいワルンの汚いビニールクロスの上でかわす会話はこのうえもなくおもしろいものだった。時には地元の著名人であり、飲んべえでもあるBapak シルビオなんかそれに加わることもあった。ツーリストから口々に出るUbudの観光化による弊害だの、バリ・ヒンドゥーの宇宙観だのといったシビアな質問に対し、Bapak シルビオは「酒飲むときぐらいリラックスしたい」顔を必死に隠して、もっともらしく神妙にひとつひとつ答えてくれたりしたものだ。そして、こういう常連の集まる場所では、きまってその中の男女がくっついたり離れたりするハプニングが起こるものだ。それが日本人同士であったり、対ウ

エスタンであったり、対バリニーズであったり、皆それぞれお互いのプライバシーを侵害しないよう気をつけながらも、やはりその手の話題が一番の関心のマトだ。恋に悩むあまり、ブラム（あまり強くないライスワイン）を、小さなグラス5杯で酔ってまわりからむもの、あまりに節操のないPacar関係に非難の集中砲火をあびるもの、今思うと他愛無くて笑ってしまうのだが。

ここセゴールで小さな人生の節目を迎えた人々もいたに違いない。かくいう私もそのひとりだ。その頃セゴールで出合い、そして通り過ぎていった仲間は、今も一人残らず私の心の中に鮮やかな印象を持って生き続けている。

大切な、大切な宝物のひとつとして。



## バリでバイクに乗ろう！

きむらよしこ

バリでバイクに乗りたけれども、国際免許もないとあきらめている人は、ぜひバリでバイクの免許をとってみませんか？車の運転は国際免許が必要だけど、バイクの免許はデンパサールへ行けば簡単にとれてしまいます。

さて、バイクに乗るのは次のような人におすすめです。

- ・もっと自由にバリ島内を移動したい人
- ・どうも最近、自転車での登り坂が苦しい人
- ・どうしても夜遅くまで飲んでしまって、帰り道の犬に吠えられて困っている人

できれば、日本でもバイクに乗ったことのある人の方がより安全だとは思いますが、Ubud周辺ならそれ程あぶなくはないので、気をつけて乗れば大丈夫でしょう。

では免許のとり方です。免許はデンパサールの警察署でとります。西側の入り口から入ると交付の受付の近くです。警察内は何かとややこしいので、必ずBali人をお願いして一緒に行ってもらってください。

時間は、月曜日から金曜日のAM7:00～PM2:00の間、随時受け付けてくれます。持って行くものは、パスポート（忘れないで！）とRp.50,000。免許交付までの手続きは、書類への名前、住所などの記入、簡単なテスト、写真撮影（ポラロイドで撮ってくれます）、あと何と右手親指の指紋をとられます。その間30分くらい。テストはローマ字で、なぞの日本語が書いてあります。問題そのものよりも、日本語を理解する方が難しい。困った顔をしていると、私の場合、婦人警官が隣に座って答えを全部教えてくれました。Rp.50,000には答え代金も含まれているのでしょうか。

みごとに運転免許を手に入れたら、次はバイクの手配です。レンタルバイクは、町のあちらこちらで見かけられますので、よ～くチェックしてから借

りましょう。当然のことですが、新しいバイクにこしたことはないですし、壊れたところがないか等のチェックをお忘れなく。そして、料金ですが、大体1日Rp.10,000くらいが相場でしょうか？期間が長いと割安になるし、あとはあなたの交渉次第。保険は別料金です。けっこう事故などもおこってしまうので加入をおすすめしますが、保障の内容があいまいだったりするので、よく確認してください。

バイクはいわゆるスクーターのタイプのものではありません。日本で原付のスクーターしか乗った事のない私は、ギアチェンジに苦労しましたが、一緒に免許をとりについて行ってくれたWayan君のドライビング・レッスンのおかげで何とか乗れるようになりました。自信のない人は、交通量の少ない道で十分練習してから乗った方がいいでしょう。

いよいよ、実際にバイクに乗ることができます！これでもう、夜道の犬も恐くありません。遠くであるオダランにも、お手軽で行けます。

ただ、気を付けてください。ここはバリです。日本とは勝手が違うことがたくさんあります。道がいきなり工事中になって、オフロード状態になったり、路肩に土砂が積まれているとつっこみそうになったり、道に穴があいていたり等々。運転マナーも日本とはお大違いで、ウインカーをつける車やバイクがないに等しいし、車、バイクは左側通行なのに、右側走行をしているバイクがあったり。一番恐いのは、対向車線の車が追越しをする時に、こちらの目の前に迫ってきたことです。

あとは、夜走っていると、犬が群れていることがあります。そんな時はあえてよけようとはせずに普通に走ると、犬の方が逃げてくれます。おいかけくる犬がいても、大丈夫、バイクならふりきれます。

雨季には、とつぜん雨が降ってくることが多いので、レインコートを常に持っているといいでしょう。

さてさて、それでは安全運転でバイクを乗り回し



**DRIVING LICENSE**  
**VALID IN BALI ONLY**  
(only for motor bikes)

Number : **C.0244/DTL NS** Date **19-01-1995.**

Name : **YOSHIKO KIMURA.**  
Birth-place : **OKAYAMA** Date **11.10.62**  
Profession : **OFFICE WORKER.**  
Address : **OSAKA JAPAN.**  
Temporary address : **TEGAL SARI UBUD.**  
Issued Date : **19-01-95.** until **19-02-95**

POLICE TRAFFIC DIVISION  
Drs. MOUSMAN FU'ADY  
COLONEL POLICE NRP. 47120001




▲私の免許証です



▲「遠慮しないで一緒に写真を撮ろう。」  
といってきたおまわりさん。



▲書類に記入しているところ。おねえさんが教えてくれます。

てください。ちなみに、免許の有効期間は1ヵ月から色々あるようですが、とりあえず1ヵ月とっておいてそれ以降は警察に見せなければいけない時に、適当にごまかす…という方法にするといいとかという話です。でも、めったに免許証を見せる機会はないと思います。

バイクがあれば、けっこう遠出もできて思いもよらない素敵な景色に出合えたりします。人にたよらないで自由に行動できるのもいい気分です。ちなみに私は9日間で300kmも走ってしまいました。(私はうしろに乗っているだけのことも多かったけれど。)

では、Hati-Hatiで行ってらっしゃい！



▲警察署横の入口。この奥で交付手続きをします。



▲一緒に行ってくれた Wayan 君です。

## Bali, 自由を求めて

西条 俊

### 第1章 プトラとの出会い

それはほんの偶然だった。

私は生れてこの方、インドネシアにも Bali にも興味はなかった。ただ、画家である父がボロブドール遺跡を見たいといっていたので、親孝行のつもりでバック旅行に申し込んだら、バリ島がコースの中に組み込まれていたというだけの話だ。したがって何の予備知識もないまま、ついでだからバリ島も見ておこうという軽いノリだった。

1992 年、春は 3 月 17 日。Bali の空港に降り立つ。日本ではまだ肌寒い季節なのに、ここは真夏。やはり新鮮な驚きだった。T シャツに汗をにじませながら、お定まりの観光地巡り。私はほとんど観光には興味はなかったが、Bali は魅力的な島だった。ガラムの甘い香りが島全体に漂っていて、それが私をエキゾチックな気分にした。時おり降るスコールは島を潤し、その後の風は気持ちよく、心を精々しくさせる。人々は元気が良く、しかもあくせくせず、自然の中に身をゆだね、その為か時間が緩やかに流れている。人なつこい瞳とナイーブな人柄。生活はシンプルだが、私には豊かなくらしに見えた。そして、私が一番心惹かれたもの、それは多くの日本人が同様に感じる、あの懐かしさだ。夏の日の入道雲が湧きおこる田園の一本道。麦藁帽子をかぶり、手に虫捕り網を持ち、洗い晒しの白いランニングシャツを着た少年の日の私。その私と Bali で出会ったのだ。永らく忘れていた、しかし、心の奥底で求めていた自分と再び邂逅したのだ。

それはあまりにも衝撃的で、日本に帰ってから、どうしてももう一度その事を確かめたかった。本当に忘れ去っていた私が今も Bali にいるのがどうか…。1993 年 7 月末。再び私はバリ島の地を踏んだ。ビーチで 2、3 日過ごし、それから UBUD に入った。日

本を発つ前に友人が「あなたは画家だから、Bali に行くのなら UBUD に行くといい。知人を紹介してやるから」と言って、“影武者”の伊藤氏のことを教えてくれたのだ。

影武者に着いた日のことを今でも覚えている。天気良く、稲が風になびき、緑がキラキラとし、その田んぼの中に土蔵造りの家があった。中から髪を結び束ねた長身の伊藤氏が出てきて、私を快く迎えてくれた。長旅で疲れていた私を気遣い、ホテルを紹介してくれると言い、たまたまそこにいた長身のスレンダーな青年に案内するように言った。彼は赤いボロバイクをとばし、私を彼の親戚であるグヌン・マルタ・コテージに案内してくれたのだった。

そのコテージの中庭は、小さいながらも色とりどりの花が咲き乱れ、緑の葉が目眩しかった。その葉影から彼はテラスで寛いでいる私の方へ少々はにかみながらやってきた。私は彼に、自分は絵描きであると自己紹介した。静かに聞いていた彼の最初の言葉はムッシアムは日本語で何と言うのかだった。「ビ・ジュ・ツ・カ・ン、ビ・ジュ・ツ・カ・ン」と教えてやった言葉を口の中で 2、3 度小さく呟く彼の横顔。その時私は初めて彼の顔をはっきりと見た。澄んだ美しい瞳を持つ男、それがプトラとの出会いだった。

それからというものプトラは毎朝グヌン・マルタに顔をだし、決まって「今日ノすけじゅーるハ？」と尋ねるのだった。私はやはり観光には興味がなかったもので、その度に「ノーススケジュール・エブリデイ・フリー」と答えていた。そんな答えをする私にプトラは少し怪訝そうな顔をしながらも「美シイ景色、見タイデスカ？」とか「散歩シマセンカ？」とか提案してくれた。私は、彼がどんな所へ連れていってくれるのか興味があったので、いつも二つ返事で OK した。彼の赤いボロバイクに同乗し、毎日

UBUDの近辺の美しい景色を見てまわった。ある時は、Baliのトラディショナルな絵画そのもののような、空間を埋めつくした風景に出会い感動したり、またある時は、雄大で男性的な滝に案内され、空の碧さと滝の飛沫の白さのコントラストに心打たれ、夜は満天に星が輝き、トロツとした甘い空気に包まれながら、闇は深く、濃い時間が流れていた。プトラと毎日ほとんどいっしょに行動をした。

彼はまるで私の保護者のようでもあるし、それとなく気遣う女房のようでもあった。私はカタ言の英語、プトラはカタ言の日本語、会話らしい会話はほとんど成立しないが、同じアーティスト同志（プトラはティルタ・サリのガムラン奏者）なのか、単にフィーリングが合うのか、なぜか気持は通じあっていた。

ある時プトラといっしょにいて、とても不思議なことに気が付いた。それは彼といっしょにいと、とても気分が落ち着くのだ。いままで誰にも感じたことのないバイブレーション。日

本にいた時のような、心がザ

ラザラと波打っていた気持

ちが静まり、やさしさに

包まれるのだ。ある

日、例によってプトラ

のバイクに相乗りして

いた時、そのことを彼

につげようとして「プ

トラは日本の禅坊主の

ようだね」と言ったら、

彼はこともなげに「私

ノファミリー、オ坊サ

ン」と言った。そう彼

はBaliのカーストの最

高位、イダ・バゲース・

プトラなのだ。私はすっ

かりプトラが好きになっていた。

瞬く夜空の星々、ピンクに染まる夕日

懐かしい田園風景、そこで働く人々の姿。幻想的なダンスやガムラン。

私は、BaliやUBUDの村を彼の心を通して見ていたことに気付いた。そして真夏の太陽の下、木洩れ陽が光と影を織りなすココナツツリーの林を、赤いボロボバイクに乗って、二人で風をきりながら走り抜けていくその瞬間、私がBaliへ再び訪れた意味が解かった。それは自由！幾重にも硬いカラで覆われていた心が解け、Baliの青い空と風の中に溶けだし、私の魂は限りなく自由であったのだ。

(続く)

1995.1



イラスト：山根聰彦

## TATTO（刺青）はやっぱり痛かった

Baron命

若気のいたりと言うには、もう年をとりすぎてしまっている。とりかえしがつかないと後悔をしても、もうとりかえしがつかない年令である。そんな年令で刺青をすることにした。シールでもペン書きでもない正真正銘、嘘偽りのない刺青である。本物はこすってもひっかいてもどんなことをしても落ちない。皮膚をはぐという手段があるがこれはルール違反としておこう。

BALIの磁場がそうさせるのか、なんの抵抗もなく刺青をする気になった。人は環境が変わるとこうまで考え方が変わるものなのか、本人もびっくり仰天している。親から授かった大切な身体に傷をつけてはいけないぞと親を思う子供心からか、ヤクザのトレードマークとなってしまう、世間様から白い目で見られるからか。それともサウナに行けない、プールに行けない、海水浴に行けない、行けない症候群になってしまうからなのか、刺青に対してなぜか以前は拒否反応があった。刺青をカッコいいと思ったことはあったが、まさか自分の身体にとは思ってもよらなかった。

ギャニアルからマデという青年が道具を小脇にかかえ出張してきてくれた。カバーのはずれた変圧機とみすばらしい手作りのペン型電動刺青彫り機を見た時にはこんなものでだじょうぶなのだろうか。と半信半疑になった。彫り師マデは右腕をのぞく全身に刺青をしている。「自分の身体を練習台にした。」とぼそつと言う、口数の少ない青年である。この若い青年に身体をまかせてもいいものだろうか。と私は少し心配になった。

図柄の見本として雑誌の切り抜きファイルを見せてくれたが気に入ったものがない。というよりはろくなものがない。ドクロマークだの裸の女だのヘビだのといった図柄ばかりである。私はもう彫る柄はすでに心に決めている。それはそれはなんと「聖獣バロン」である。バリヒンドゥーの儀礼を見るにつ

け、この聖獣バロンに惹かれてしまったようだ。右腕に10cm 角程の聖獣バロンの顔を注文した。

作業は私のバンガローのテラスで太陽が明るく射しこむ健康的な雰囲気が始まり、マデは素早く下書きをすませた。

さあいよいよ針を刺す時がきた。刺青とは何本も並べてひとまとめにした針を肌に刺し傷をつけていき、その傷に墨を入れ込むと聞いている。これはかなり痛いという、それゆえに刺青のことをガマンと呼び、刺青は男気の象徴でもあったようだ。しかし私のするのは機械彫り、痛みは数倍少ないと思う。それでも熱をだして寝込んだ者、刺青中に痛さのため失神した青年もいたと聞く。私はいたって痛がり屋、途中で音をあげ逃げ出すのではないかと内心は心細さでいっぱいである。

チーンという音と同時に肌に痛みがはしる。たしかに痛い。飛び上がるほどではない。女性に背中をひっかかれた時のあの痛みである。といっても経験したことの無い人にはわからないだろうが。肌の柔らかいところ、たとえば内股などはもっと痛いらしい。バリの青年は気をまぎらわすためにアラック(ヤシ酒)を飲むという。私は余裕があるところを見せ、週刊誌に目を落とす。

一時間半程で墨のアウトラインが完成。UBUDでよく見かけるド太い線の刺青とは違い、繊細で美しい線が彫られている。腕が少し熱を持ちはじめてきた。普通一時間彫っては日をおいてまたの機会に彫ると聞いていたが、マデはコーヒーに口もつけずにモクモクと作業に熱中している。私の肌が彫りやすく血もにじまないのを感じ、一気に色の塗り込み作業に突入してしまった。ひっかいたところを再びひっかいているような痛みがする。「今日はもうやめようか」と逃げ腰になった私の腕をおさえてマデは「今日中にすませてしまいます。」と冷たい一言をはいて作業に没頭してしまう。赤、緑、黄色が





ほどこされ、全工程3時間マデは一気に刺青を完成させてしまった。私の痛みのガマンも限界に達し、全身冷汗をかいていた。出来上がりの聖獣バロンはちょっとひょうきんにみえるが満足感で気分は爽快。彫り終わった右腕はみみずばれになって触るとピリピリッと痛みがはしる。2日間は腕にマンディーをしてはいけないそうだ。3日目に痛みはなくなり日焼けのあとの皮膚のようにめくれはじめ、一緒に刺青が落ちるのではないかと心配になったが、もちろんそんな事になるわけがない。バリの青年はOILを塗って肌を落ちつかせるというが、私はめんどくさがり屋でそれをしなかった。

一週間目に皮はすべてむけ、スベスベとした私の本来のモチ肌にもどった。聖獣バロンは今、私の右腕となって私を見守っていてくれるようだ。

#### ●刺青（解説）

これは日本人男性I氏の刺青体験記である。とにかくバリにはTATTO\_刺青をしている男性が多い。おじちゃんやおじいさんと刺青している人はほとんどいないからおそらくこの習慣(?)は、ここ数十年のうちに広まったと思われる。現在、クタはもちろんのこと、デンパサールなどの大きな街やロンボクでも、このTATTOの看板をよく見かける。欧米から流れてきたヒッピーがもたらしたのか、それともチャイニーズマフィアは刺青をするのかどうか分からないが、バリの青年はみんな気軽な気持ちではいはい彫ってしまう。

何人かのTATTOバリニーズにその動機を聞いてみると、むにゃむにゃ言って「でへへ」と照れ笑いするだけで特に理由はないようだ。

まだ10代のUBUD郊外の田舎に住んでいるG君は、背中一面にまるで壁の落書きのようなヘタクソなドナルドダックが線描になって彫ってある。いくら自分では見えないとはいえ、さすがに本人も後悔しているようで、いわゆるこれは若気のいたりという他ない。気の毒である。イダ・バグースもワヤンもネコもシャキシもTATTOをしてしまうここバリでは日本の極道さんの本格的刺青は人気のマトだ。聞いた話だが、その道の方がバリにリゾートに来た。(来て悪いか!!)さすがにここは熱帯のリゾート地、その方もショートパンツとランニング姿でクタをジャランジャランしたそう。もちろん、登り竜だの虎だの、美しいTATTOは丸見えだ。これが日本なら人々はそそくさと道をあけ、なるべくそちらを見ないようにするはず。しかし、クタでその方は、バリニーズに好奇の目でジロジロ見られるどころか、一步も前に進めない程の人の輪に取り囲まれてしまった。そして彼の肩やら腕やらをあのバリニーズ特有のスキンシップでもって、なでたりさすったり「Aduh! ganteng!! (カッコイイ〜)」と叫んでペン!と(親しみをこめて)背中をたたくものまであらわれた。

その方の戸惑いは尋常のものではなかったらしい。日本人の、象牙色の肌に彫られたあでやかな刺青もすばらしいが、バリニーズのチョコレート色のたくましい身体の上の落書きのようなTATTOもこれまたいいものだ。私はとっても好きである。

## 断食中の商いはつらいよ…

—タフ屋のにいちゃん、がんばれ！—

この原稿を書いている2月、ただいまイスラムの断食月の真只中。今年の断食は2月1日から始まり、3月3日のイドゥル・フィトゥリ、断食明け祭まで約1ヵ月続きます。そのあいだ、敬けんなイスラム教徒は、太陽が昇ってから沈むまで、つまり日中はものを食べないどころか、水さえ飲まないのです。ここUBUDにも、故郷を遠く離れて仕事をしている、他の島から来たイスラムの人々がいます。前回ご紹介したBAKSO売りもそうですが、さすらいのWarung（屋台）シリーズ第2弾、今回のTahu（タフ）売りも、ジャワやロンボックから来ている人が多いのです。

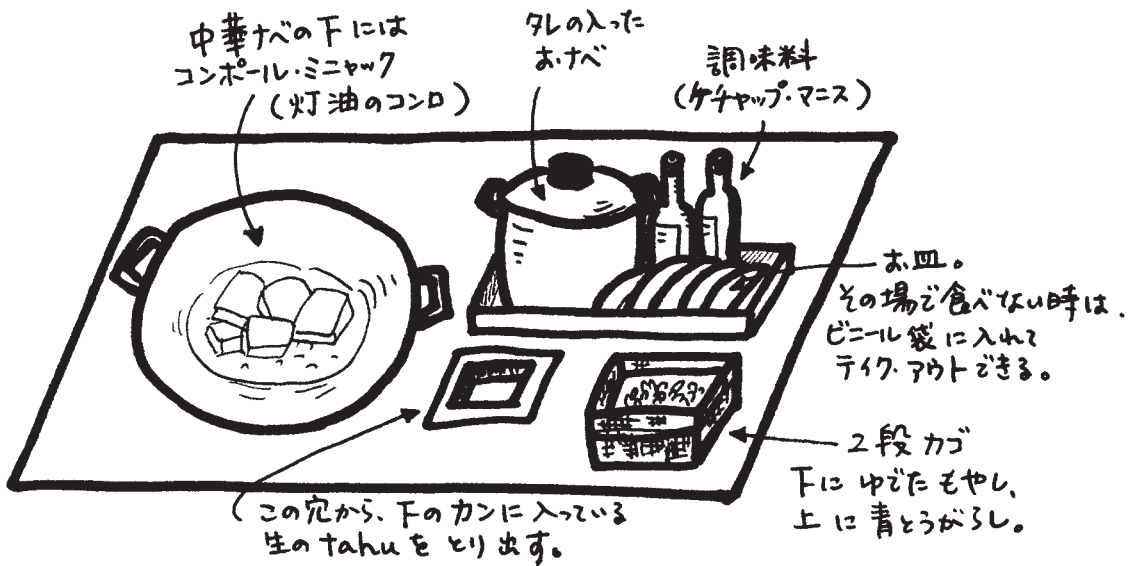
…で、今回取材に協力してくれたサムスリくんも、東ジャワ・ジュンブル出身のイスラム教徒。いろいろ質問しているあいだ、なんとなく元気がなさそうな様子に、「どこかからだの具合でも悪いの？」ときくと「いやあ、断食中だからね、夕方になるとしんどくて…」と苦笑いしていたのでした。断食中の最初と最後の日だけ断食を実行して「Tidak apa apa」と涼しい顔をしているイスラムの若者が多い中、エナちゃんはサムスリくんのまじめな、あつい信仰心に感心してしまいました。

さて、タフ、インドネシアの豆腐、これはVol.2のダイズ食品でもふれましたが、おそらく中国から伝わったと思われるこの健康優良食品、庶民のおかずとしてインドネシア全国に広まっています。ちょっとおなかすいたな、と思う夕方、ポクポクと木魚のような音を響かせてタフ屋さんはやってきます。といっても、昔の日本のお豆腐屋さんのようなタフをそのまま売のではなく、タフ・ゴレン（揚げドウフ）の料理を売り歩いているのです。彼らが使うの

タフは、タフ・ロンボックと呼ばれる、くさみも酸味もなく、日本の木綿豆腐に近いもの。約4cm四方、厚さ1cmのこのタフを屋台にそなえつけてある中華ナベの油の中に放り込みます。ジョワジョワと音をたてて揚がったタフは、皮がこんがりして、中がふかふか。食べやすい大きさにハサミでちょんちょんと切り、小さめのお皿にこんもりと盛り、ティパットを、これも一口サイズに切つてのせてくれます。ティパットはかたまり状のごはんのこと。小さめのビニール袋に洗ったお米を入れ、ビニールにフォークでプツプツ穴をあけて、まるごとそのままお湯の中に入れて炊き上げます。お米がふくらんで、袋の型にかたまったごはんになるわけです。これはいくぶんやわらかめに炊き上がっておなかにもやさしそう。そしてこのティパットの上に、ゆでたまやしをばらばらとのせ、秘伝のタレをたっぷりとかけてくれます。このタレはピーナッツやにんにく、各種香辛料をすりつぶしてお湯を加えて練ったもので、トロリとしていて香ばしく、ほんのりと甘辛く、まるでミソだれのようにコクがあってとてもおいしいもの。タレの上からケチャップ・マニス（甘いしょうゆ）を少したらし、生の青唐子を、ハサミで小さく切つてふりかけて、できあがり。

サムスリくんいわく、「毎日そんなにきばって仕事をしているわけじゃないよ。せいぜい昼すぎから出発してUBUDをひとまわり、夕方には帰る。一日平均して30杯くらい売るかな。」

「住んでるところ？テガスだよ。グヌン・ジャティのグループの人たちとも仲いいよ。4年前にバリに来て、2年間、ボスの下でBAKSOを売ってお金を



貯めて、このタフの屋台を自分ではじめたんだ。東ジャワの故郷には3ヶ月にいったんくらい帰ってる。両親や兄弟達のことを考えるとさみしくて。」やさしくて温厚そうな人柄がにじみ出るような笑顔で語ってくれました。断食の真最中、こんなおいしそうなものを目の前にして、自分で食べられないのはさぞつらいことでしょう。

ふかふかのタフとやわらかいティパット、甘辛いタレともやしの歯ざわり。こんなに簡単に安価なものなのに、絶妙の味わいをかもし出すタフ・ゴレン。夕方のおやつに、ぜひ食べてみてね。



ENAK ENAK ENAK  
ENAK ENAK ENAK

いまやバリ・ダンスの代名詞になったともいえるご存じ Legong。実は Legong には、いろんな種類がある。私達が UBUD で定期的に観られるレゴン・クラトンをはじめ、ラッサム、クンティール、クントゥール、ジョボッグ、クビャール・レゴンなど、数え上げるときりが無いほどだ。それにしてもあの衣装、美しいですね～。花をつけた黄金色のかんむり、中性的でいて妙にイロっぽい雰囲気…。さてこのレゴンの衣装、ありゃいったいどんなしくみになっているのか？あのキラキラした部分はいったい何でできているのか？化粧はどうやってすんの？というわけで、今回、あなたもびっくりのレゴンのひみつをあばいてみようと思う。モデルになってくれたのは、さわやか笑顔のステキなミキちゃんである。ファンレターは編集部宛てでどうぞ。

# Legongのひみつ

## ●メイク編●

### ひみつ：その1

ベースは白塗りからはじまる。

踊り手さんご用達のメイク用品は SARI AYU というメーカーで揃う。まずリキッド系の下地ファンデーションをこてこてしっかり塗る。その上からパウダーのファンデをたっぷり。あご、首までのばす人も多い。「この踊り手さん、色白だなあ」と思うと、足や手が美しいチョコレート色だったりすることがよくある。

入れる。これはアイペンシルで、ナミダ型（変形菱形）を黒く描いたあと、中央下よりに白いポッチをちょこんとつけるのだが、これがなんと練り歯磨きなのだ。踊り手さんのメイクボックスには必ずペプソデントのチューブが入っている。ペンシルの先っぽにちょいをつけて、ちょんちょんと目じりにもそれぞれ三つつける。これはスンバヤン（おいのり）する時につける米粒をあらわしているそう。最後にまっ赤な口紅をつけて完成。

### ひみつ：その2

アイシャドーはアートだ！

基本的には、赤・青・黄の三色ですませてしまう。濃いピンク・緑・白のパターンもある。黄及び白はハイライトがわりである。このとんでもない組み合わせの三色をすばらしいグラデーションワザで、あんなに美しいメイク・アップにしてしまうのだ。

バリの女のコは、とにかく化粧ばえする。もとのつくりがいいからだ。信じられないほど長くクルリとカーンしているまつ毛、ほどよい彫りの深さ、さくらんぼのようなくちびる…。どんな小さな女の子でも、踊りの時は大人顔負けのセクシーさをかもし出す。思わずゾクゾクしてしまうのは男性ばかりじゃない。それでいて妙に神々しく、清らかな感じがするのだから、すごい。実は同じアジア人ということもあるのか、日本女性もこのメイク、似合う人が多い。目の大きさはたちうちでないけれど、「顔だけバリ・ダンサー」も夢ではない。トライしたい人、ぜひどうぞ。

### ひみつ：その3

ひたいのポッチはなんとペプソデント！

アイシャドーとはほ紅を入れたら、次に眉毛とアイライン。黒いアイペンシルでくっきりと描く。そして両眉毛のあいだ、ちょうどまんなかに第三の目(?)を描き



## ●衣装編●

### ひみつ：その1

かんむりはこうなっている！

ピカピカ金箔が美しい本体は、かたい水牛の皮に彩色し、細かい透かし彫りがしてある。ひたいの部分には、カラーストーンや鏡の小さく切ったものがくっつけてある。頭の上部は、竹でできた細い棒をしならせて格子状にしてあり、そこに一定の間隔をおいて花をさしこむための針金がまきつけてある。ブンガ・ジュブンという生花をそのつど使うものもあれば、布で精巧につくられた造花をつけっぱなしにしているものもある。こめかみ部分から垂れ下がる赤いフサフサは、実は毛糸。

昔は生花を使ったのだろう。

頭のまわりをぐるりとリング状になっている基礎の部分のはがしりと固く、すっぽりかぶると、まるで締めつけられているように痛い。しばらくすると頭がガンガンしてくる。踊っている途中にずれないよう、あごひも（ゴム）をつける場合も多い。これがまたピチピチで、のどがグフグフの状態になる。

### ひみつ：その2

上衣は、こうして見るとけっこう間抜け…。

部品(?)をのちにいろいろつける胴の部分は、「どーせかくれてしまって見えないんだから」と、模様は入っていない。合理的だ。

ブラウス型になってはいるが、前みごろの真ん中は、ホックもジッパーもなく、安全ピンでいちいちとめていく。(写真A)

A.



B.



### ひみつ：その3

『踊り子や、汗のにはいもかぐわしき』

下のサルンは普通のサルン状のもの。横の長さが腰まわり一周分と、プラス少ししかないので、実はヘタをするとガバッと見えてしまったりする。

ここでショッキングな事実がある。この金プリントの布の上下、洗ってはいけないのだ。ドライ・クリーニング？そんなもん、あらへん。

使用後は念入りに陰干しし、ていねいにたたんでしまっておく。「だって、汗かくじゃん」と言われても、洗っちゃダメったらダメなのだ。

洗うと金プリントがとれてしまう…というのが理由らしい。

### ひみつ：その4

あの上半身は“ぐるぐる巻き”だった！

おへそのあたりから、上にむかって幅約9センチ、長さ8～9メートルの帯状のものをぐるぐるぐるぐる巻いていく。まず下巻き、これはサホ・ダラムといわれる無地のもの。上に巻く黄金色のサボ・マスがずれないようにするものだ。これはとにかく締めつけるように、ぴっちりぎゅうぎゅうに巻く。胸の膨らみは、布をうまく交差させて、押さえ付ける。この巻きが甘いと、後でひさんなことになるかねない。巻きはじめと巻きおわりは安全ピンでとめる。

タコ糸でしばられたチャーシュー用のカタマリ肉のごとく、極度のシェイプアップ状態に、息タエダエになる。

(写真B・C)

C.



## ひみつ：その5

### 部品いろいろ

これも水牛皮。ひとつひとつに名称がある。

つける順序は、1. 腰の飾り帯（ボボカン）  
2. 前だれ（ラマツ） 3. 肩ヨロイ（スシンピン） 4. スシンピンの下端が隠れるように巻く黒いベッチンの帯（プラン）  
5. 首飾り（ボバンドン） これもすべて安全ピンでとめる。安全ピンだらけである。

腕輪、上下計4ケは輪ゴムでとめる。（写真D・E・F）

D.



E.



## ひみつ：その6

ピアスに意外なからくりが…。

一見すると、大きな穴が耳にあっていてと思ってビビる。そう、ワインのコルク栓のようなかたちの金の耳飾りが、耳たぶを貫通しているように見えるのだが、実は前とうしろでまっぷたつに分れていて、ちゃんと細いピアス形式になっているのだ。とはいうものの、穴にさしこむ部分がつまようじをもう少し太くしたくらいの、それもネジ状になっているものも多く、われわれ日本女性がふつうあけているくらいの穴ではとうていたちうちできない。無理してねじ込んだら血が出た…というナマナマしい体験談(?)もある。しかし、昔のバリ女性は、ほんとうにコルク栓くらいの太さの穴をあけていたそう。小さいときから少しずつ大きくしたらしい。今もおばあちゃんの耳を見ると、指一本くらい入る穴があいていることが多い。

さあ、Legong 一丁上がり！なんてはしゃいでいる場合ではない。実際、これだけのものを身につけるだけで、汗ダラダラ、息ゼイゼイ、頭ガンガン、動けばマジンガーZのようにごちないし、耳たぶからは出血ときた。冗談はさておき、よくこれで小さな女の子が涼しい顔でキビキビ踊ってられるものである。脱帽。恐れ入りました。最後に一席。パンクロッカーとレゴンダンサーはよく似ているもんだねえ。その心は…。安全ピンがないとステージに立てないじゃないか。

座ボタン…5枚…、とられたあ！

F.



## UBUD よろず百科

# BANGLI は今日も雨だった

黄昏野ライダー



BANGLI (バングリ) と書いてバンリと読む。バンリだからといって万里と書くわけでもなく、もちろん長城ではない。冗談はさておき今回の特別企画である BANGLI 探索取材の報告をします。

UBUD からスベダモートル (HONDA 100CC) を走らせギヤニアルの街を抜け5分程走ると逆トの字の三叉路に出る。それを左折するとあとは一本道で BANGLI の中心に着く。およそ40分のミニ・ツーリングである。

BANGLI についての予備知識はまったくなく思いめぐらせたイメージは山あいの霧の多い街。そこでタイトルも「BANGLI は今日も雨だった」。土地には神がかりなパワーがあり、オダランでは時折 KERAWUHAN= トランスに入る人が多いと聞く、この探索中にも一度見る事ができた。バリアンが多く住み、中でも高名なのは、A.A.Kutu Gde さん、かれのところへは遠くから村人が、そして治療や瞑想を学びに訪れるツーリストも多いと言う。そんな土地柄からなのだろうか BALI で唯一の精神病院がある。これを知っていていかにも BANGLI が神秘的な土地に思えてくる。こんなジョークを UBUD の人が言う。踊りを習っているツーリストがよく道を歩きながら首をフリフリ、手をフリフリしている。それを見て「BANGLI の病院に入れられるぞ!」とたしなめる。

### ◆見どころ

ガイドブックに掲載されているところをのぞき、穴場的な観光地探索に出かけた。BANGLI を中心とする30分から40分ほど走る地点には多くの見どころがある。その中でも見逃すことが出来ないのが KINTAMANI と BESAKIH であろう。目的地はガイドブックに紹介されている通りであるが道中は道中でこれがまた素晴らしい。

KINTAMANI へは往路登り坂を30分。BESAKIH へは往路上り坂を40分で到着する。左右の景色はバリを代表する風光明媚な絶景である。点在する村々は古いバリを感じさせる質素な家が目につく。少し肌寒いがツーリング・ライダーにはよだれ物の興奮であろう。こりゃ〜気分は最高!

### ◆PENGLIPURAN

KINTAMANI 方面に4km(7分)ほどなだらかなカーブのある登り坂をバイクで走らせると KUBU 村のサインが目につく。それを見過ごし少し走ると左手に TRADITIONAL VILLAGE の看板を見つめることができる。看板の道を左に折れ500mの地点にある大きな門が目的地。入村料を払い、オートバイを駐車し村の中に入る。

この村は KINTAMANI.Bayung Gede 村から移り住んだ人々が昔からの伝統と信念と習慣を守り、村独特の生活を営んでいる。人口わずか743人の村である。バリの建築様式を忠実に再現した家並みが美しく、石畳がどこか西欧風である。この地域は山間部で涼しく、住み心地がよく、昔は王様の多くがここに領地を持っていて、しばしばくつろぎを求めて訪れたそうだ。運がよければこの村の荘厳で特色あるバリ儀式を目にすることができる。

### ◆BAMBOO FOREST

PENGLIPURAN の村に隣接している竹の森で、竹のかもしれない不思議な空間は、古代にタイムスリップしたような錯覚を起こさせる。30分ほどの散策を楽しむことができる。

### ◆CANDI TEBING

BANGLI の中心から BESAKIH に向かって10分ほど山道を走り、急な登り坂を登りつめたところに十字路がある。JEHEM の村である。それを左折し村の中ほどにある小学校の脇道左に入り、深い谷底に400m降りていくと、南国とは思えない静寂さとひなびた雰囲気空間に出る。その祠に何世紀か前の CANDI が納められている。

### ◆PURA TIRTA HARUM

オートバイを道端に停め、PURA までの道のりは350m程、細い道を降りる。ラフティングのボート乗り場に降りる階段よりも長く急なハードな道である。村人はガボガンを頭にのせこの急な道を往復する。

谷川の対岸の崖淵に小さな PURA がある。橋を渡ると PURA の入り口である。PURA の名が TIRTA とついているように崖のあちこちから清水が流れ落ちている、PURA はその上に鎮座している。

BANGLI 王宮の持ち物で王様のマンディ場であったという。今も清水のマンディ場あり、村人達がマンディをしている。あなたも試してみたいだろうか。

### ◆宿泊施設

#### ○ARTHA SASTRA INN

BANGLI 王宮の宿泊施設である。UBUD の王宮をイメージしていたせいか、あまりのみすぼらしさにびっくり。季節外れの海の家のようなのである。しかし料金は安いので泊まって歴史をかんじるのもよいかもしれない。

#### ○BANGLI INN

新しく清潔で少しおしゃれな白い館。BANGLI のラッフルズ・ホテルと命名。PURI の裏手にあり、朝市やセゴールに近いので便利である。

○ロスメンはどこも商人宿のような長屋形式。UBUD のような民宿ではなく、バンガローコテージもない。いかに UBUD の宿泊施設が充実しているかわかる。

### ◆レストラン

ツーリストが少ないせいかレストランはないが WARUNG は数軒ある。夜は UBUD にはなくなってしまったセゴールが BANGLI では健在、賑わっている。

# BANGLI



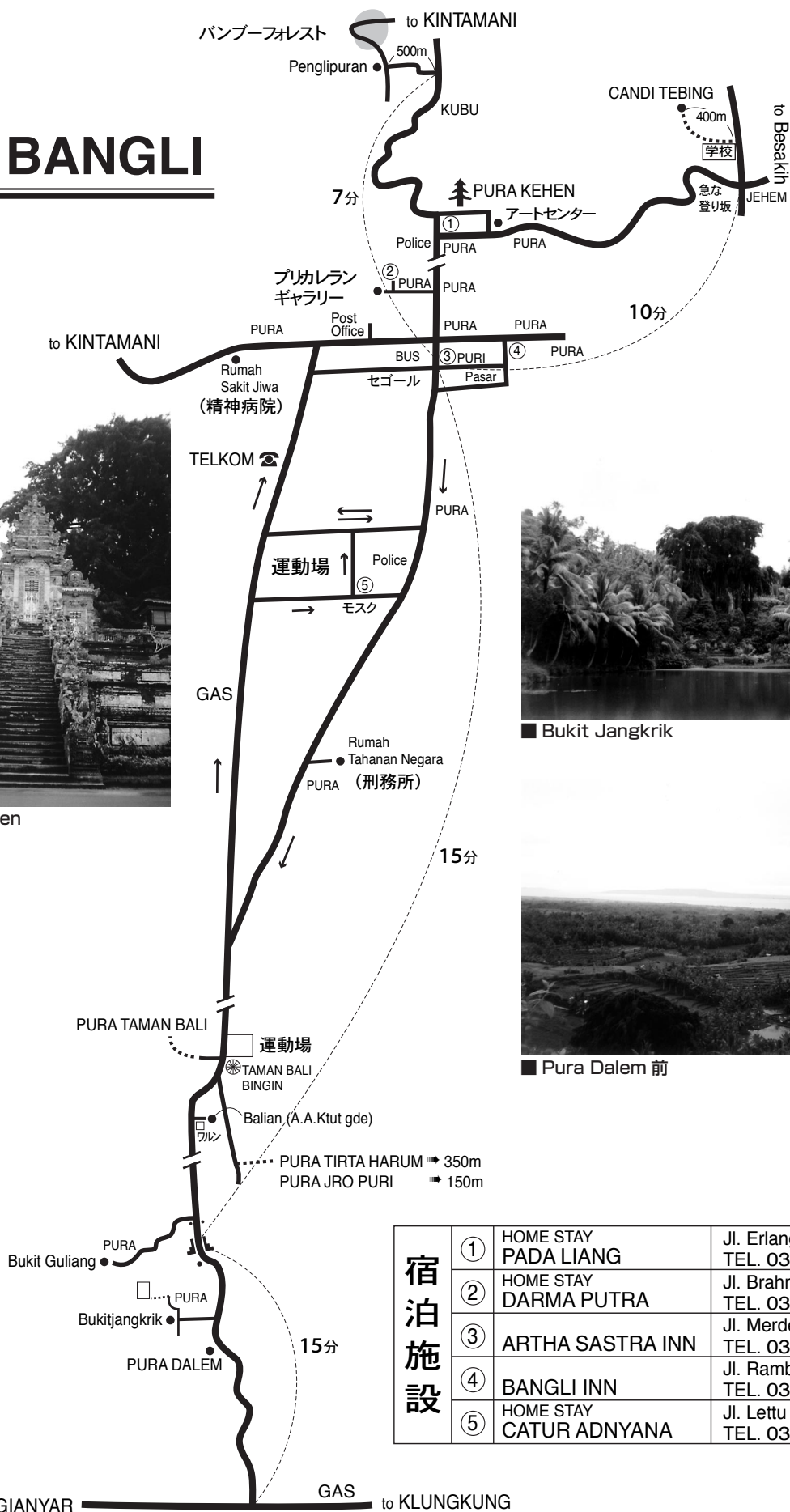
■ Pura Kehen



■ Bukit Jangkrik



■ Pura Dalem 前



|      |   |                         |                                         |
|------|---|-------------------------|-----------------------------------------|
| 宿泊施設 | ① | HOME STAY PADA LIANG    | Jl. Erlangga No.3<br>TEL. 0366-91639    |
|      | ② | HOME STAY DARMA PUTRA   | Jl. Brahmaputra No.1<br>TEL. 0361-91179 |
|      | ③ | ARTHA SASTRA INN        | Jl. Merdeka No.5<br>TEL. 0366-91179     |
|      | ④ | BANGLI INN              | Jl. Rambutan No.1<br>TEL. 0366-91419    |
|      | ⑤ | HOME STAY CATUR ADNYANA | Jl. Lettu Lila No.2<br>TEL. 0366-91244  |





■ バンブーフォレスト

UBUD 近郊の村々には、このようにまだまだ知られざる穴場的ポイントが数多くある。もしあなたが車やバイクを借りることができるなら、UBUD 滞在中の1～2日をこんな静かな村で過ごしてみてもいいだろう。ひとりでいたって寂しくなんかない。外国人がまだめずらしいのか、ワルンでコピを飲んでいてもどこからか村人達が集まってきてカタコトの会話でコミュニケーションが始まる。素朴な村人達との嬉しいふれあいのひとときだ。時には「ぜひうちに遊びに来てくれ」とひっぱりだこになる。今回紹介したBANGLIはUBUD よりもいくぶん標高が高いので夜はとても冷える。長袖の服を用意していこう。

マジック・パワーと心安らぐ澄んだ空気、さあ、BANGLI 探索に出かけよう！



■ Penglipuran



■ Candi Tebing



■ Bukit Guliang



■ Puri Bangli(Artha Sastra Inn)



■ Kabupaten Bangli の入口



■ Kabupaten Bangli の入口

# Ubud Buku Catatan Harian

1993.10.3~1993.10.15

3

## バリ島日記

取材・文

西村久美子

### Ubud Buku Catatan Harian

#### ■ 10月10日 (日)

ウブドに着いて一週間が過ぎた。楽しい時間は過ぎるのが早い。レストハウスがフランス人のゲストと日本人ブツクサカップルでいっぱいだったので、部屋のテラスに朝食を運んでもらって食べる。バナナとパイナップルのホットサンド、目玉焼き。今日のフルーツにはコンデンスミルクがかかっている。朝市を見に、私とカズ、タッチャンで出かけた。野菜、果物、香辛料、魚など、あらゆるものが売られていてすごい喧騒だ。匂いも強烈。地元の人は、頭の上に箆を乗せ、その中に買物をぎっしり入れて歩いている。ベモに乗ってやってくる人も多い。隣のパサールで、サロンに合うサンダルを捜すことにした。ビーサンとスニーカーしか持っていないので、足元もおしゃれにキメようというわけだ。タッチャンは私たちと別れて、一人でぶらぶらしてみると歩いていった。海外旅行初体験の彼女も、一週間たてば、この辺は庭みたいなのだろう。ナンパされないようにね。パサールの2階に靴屋を見つけ、赤い鼻緒の竹製サンダルを買う。これなら下駄感覚でサロンと合いそうだ。途中で両替をしようと思ったが、今日は日曜のせいかレートが低いので中止。たばこを仕入れ（ガラムやアメリカ物を混ぜて8個で1万ルピア）、宿に戻った。モンキーフォレストの方まで散歩に出かけていったキーボーとメグミが帰ってきた。あちらの方では、19.70 ルピアで両替できたそう。二人と私たちの4人でプールへ行く。今朝は雨だったが、今はすっかり晴れてきた。たまった脂肪を少しでも落とそうと5往復。でも、そのあと飲んだビンタンでプラマイゼロになってしまいそう。プールサイドでヤッチーをする。なんとメグミは1のヤッチーを2回も出して、ここには1の神様がいるなんて言っている。カズもバリのヤッチー第一弾を出して機嫌がいい。帰りに、前に行った小皿料理屋「SANAK」へ寄る。メグミの説明によると、この店はスマトラのパダン料理を出す店で、すべての皿がテーブルに出され、手をつけた皿の分だけお金を払うシステムだそう。前に覗いたとき、20皿近い料理を目の前に並べていた白人カップルを見て、ずいぶん大食いだなと思ったのは私の勘違いだったのだ。みんなに人気のあるカレーコロッケを人数分と、魚のカレー、えびとポテトの煮物風などを選ぶ（11900 ルピア）。イクちゃんから教わっておいた「ブックス」の発音でメグミが伝ええると、今度はちゃんとわかってもらえた。メグミはどんどんインドネシア語が上達しているようだ。出歩くときにはいつも辞書を持っている。意外と勉強熱心な彼女に感心！ついでに冷蔵庫の置いてある店で冷えたビンタンを買い（大ビン3000 ルピア）、部屋のテラスでランチ。そのあとセブンブリッジを5回。旅の前半、あれほど負けていたカズが調子良くて圧勝した。イクちゃんと一緒に出かけていたタカシが戻ってきた。明日帰る彼は、積極的に動き回っている。彼も初めての海外旅行で、着いたばかりのときは、借りてきたタカシ状態だったが、今はイクちゃんという友達を得て自由に動き回っている。クタでトップレスのオーギーを見たと自慢していた。ランチの後、しばらく昼寝。シャワーを浴びて、ワヤンさんちのパーティーに出かける準備をする。サロンを何度も巻きなおし、何とか形にしてクバヤを着て帯を締める。髪にハイビスカスをさせば、バリ風フォーマルスタイ

ルの出来上がりだ。5時過ぎ、イクちゃんの運転で出発。まずは、タナロット寺院に向かう。夕日を見るのに間に合うようにイクちゃんは車を飛ばす。寺院の参道を抜けると、クバヤを着た私たちに周囲から「バグース！バグース！」の声がかかる。これはかなり恥ずかしい。地元の人から見れば、浅草寺の仲見世を、振り袖姿のアメリカ女性（別にアメリカ人じゃなくてもいいけど）が歩いているようなものだろう。「バリの文化も知らないくせにファッションだけ取り入れよって」と怒ったオジジもいるかもしれない。「まあ、何だろうねえ、あの子たちは。へんなサロンの巻き方してるヨ」と、眉をひそめたオババもいるかもしれない。でも、おおむね周囲の目は微笑ましく私たちを迎えてくれているようだった。一番冷たかったのは、日本人観光客かもしれない。500 ルピアを払って階段を降り、浜辺に向かう。ちょうど太陽の下のはじっこが海に着水するところだ。あたりは夕焼けに包まれている。波はかなり荒い。振り返ると、タナロット寺院がシルエットになって佇んでいる。バリの寺院はなぜ、夕日の美しい場所に建てられているのだろう。再び車に乗り、タバナンの町にあるワヤンさんの親戚の家へ急ぐ。今日のパーティーは、先日、沼津でパロンドダンスの公演を終えたメンバーへの「お帰りなさい」の集まりだとか。打ち上げのようなものだろうか。家の入り口に着くと、ワヤンさんが迎えてくれた。庭が会場になっていて、木と木の間にテントが張られている。パイプの椅子がたくさん並び、何人かの人すでに座っていた。ワヤンさんは私たちを一番奥の竹の椅子に座らせてくれた。まるでVIP席だ。物珍しそうな、でも暖かい視線を受けて座っているうちに、たくさんの人々が集まってきた。パーティー

料理はバリのメニューということで、それを見せてもらった。なんとブタが一頭丸焼きにされている。アメ色にロースとされたブタは、目をつぶり、頭に飾り物をして横たわっている。ほかに、つくねそっくりのサテ、チキン、お赤飯のようなご飯、フルーツなど、盛り沢山だ。やがて、50人近い人たちが集まってきて、整然と椅子に座り始めた。ワヤンさんがカズに「ブタの頭にナイフを入れてください」と話している。どうやらそれがパーティーの合図のようだ。年長者として敬意をはらわれたカズは、ナイフを持ってブタの頭に切りつけた。バリバリという感じの手触りだったそうだ。遠巻きにそれを見ていたタカシは少し吐いた。私たちから始まって、みんなが順番に料理を自分の皿に取り分けていく。ワヤンさんはアラックに気前よくライスワインを入れて配ってくれる。タツちゃんも約束を忘れてアラックを飲んでいる。つくねのようなサテはけっこう辛いがおいしい。食べたり飲んだりしながら、まわりの様子を見るが、みんな静かに食事をしているだけで、アラックを飲む人もいないし、席を立てて談笑するわけでもない。日本だとこんなとき「えー、宴もたけなわになってまいりましたところで…」なんて仕切り始めるジーサンがいるものだが、実に静かにパーティーが進行しているのだ。パーティーらしい雰囲気盛り上げているのは、カセットデッキから流れる音楽くらいで、それもドリカムやチャゲアスがかかっている。しばらくすると、10人くらいの若いアンチャンたちが、部屋のなかに入ってゲームを始めた。大人のなかにも退屈だからファミコンでもやっか、という雰囲気だ。その中の一人で、ワヤンさんのいとこという人が話しかけてきた。彼は大学で経済学と英語を学んでいて、英語でロックを歌い、ギターを弾くのが夢なのだと語っていた（と思う。何しろ私の英語力は稚拙だし、こちらの人の発音もクセがあって聞き取りにくいのだ）。私たちの席に、バリダンスの先生がやってきた。デンパサールの舞踊学校で踊りを教えているという男性だ。無鉄砲にも女性3人は、レゴンの振りを教えてもらう。立ち方、足の開き方、腰のひねり、腕の上げ方、指の形などを、身振りで直される。地元の人にはクスクス笑われているが、こんなチャンスはめったにあるもんじゃない。特に難しいのが目の動きで、顔を動かさずに目玉だけ左右に配るのは至難の技だ。カ





ズは、パリスの振りを教わっているが、必要以上に表情が豊かでなんだか滑稽。ここまできて、私たちは完全な見せ物状態になっていた。地元の人にしてみれば、山梨のどこかの村で（別に山梨じゃなくてもいいけど）、フランス人が（別にフランス人じゃなくてもいいけど）、日本舞踊の振りを習っているようなものだろう。何も恐ろしいものがなくなった私たちは、今度は先生にパリスを踊って欲しいとリクエストしてしまった。ガムランのテープをかけた先生は、照れながらも快く踊ってくれた。指の動き、目の配り方、つま先まで神経の行き届いた足の運び…。わずか1メートルの近さで、名人のパリスが見られるなんて大感激だ。10時半頃お開き。みんなにお礼を言って、ウブドに戻った。部屋で帯を解き、サロンをはずすとホッとした。



## ■ 10月11日（月）

8時朝食。カリカリトースト2枚とタマネギ入りスクランブルエッグ、フレンチフライが今朝のメニュー。今日は先発隊3人が日本へ帰る日だ。イクちゃんはタカシの隣に座って「あと1ヵ月くらいいたらイデスネエ」なんて言っている。朝食の後、メグミと私、カズの3人で、モンキーフォレストの方までジャランジャラン。ティンクリック屋さんまで足をのびした。ライスフィールドが広がるこの辺りは、観光客も少なく静かだ。この楽器屋さんのご主人は有名な職人だそうで、ここでティンクリックのレッスンも行っている。1時間レッスンをしていくというメグミと別れて、私たちは最初、旅の計画をたてたときに泊まる予定になっていたホテル「アグンラカ」に行ってみることにした。その途中「パー」というカン高い声に振り返ると、マディちゃんのバイクの後ろにまたがったタカシがいた。男同士でどこかへ遊びにいくらしい。アグンラカの門をくぐり、レセプションでホテル内を見せてほしいと

告げると、係の女性は笑顔で案内してくれた。壁のない開放的なリビングと、2階のベッドルームを備えたバンガローは、広々としてとても使いやすそう。中庭に出ると、プールがあり、その向こうにはライスフィールドが広がっている。スイートのバンガローの前には蓮の花が美しい池。プライベートな時間が過ごせそうなアグンラカを、私はひとめで気に入ってしまった。今回は大勢だし、初めてのウブドだから、アットホームな Sehati が最適だけど、今度来るときには、2泊くらいここに泊まりたい。きれいな発音で英語を話す案内の女性は、今日1棟バンガローが空いているのでどうぞ、と勧めてくれたが、もっと時間があれば、その場でチェックインしたくなるほど素敵なホテルだ。「来年来ると思います」とお礼を言って、パンフレットをもらいアグンラカを出た。帰り道、昨日キーボーが両替した店でエクステンジ（19.60Rp）。喉が渴いたのでミニショップで冷えたビンタンを買い、飲みながらブラブラと帰る。トロピカーナの前にある子供服専門店で、出産ブームだった兄弟や友人の子供のためのお土産を探した。バリ風のプリントが鮮やかなイージーパンツやシャツ、つなぎ服などが置いてあって、みんなセンスがいい。カズの弟のふっちゃん、植松家、井上家、浅田家、亮太の5人分買って4万8000ルピアだった。日本で子供物を買ったら、同じ数字で「万」がつくだろう。宿に戻ると、メグミがティンクリック（2万Rp）とテキスト（2000Rp）を買って帰ってきていた。1時間のレッスン料5000ルピアを払い、基礎の練習をしてきたそう。タッチちゃんが昼寝から起きてきた。メグミの分も洗濯を終えていたキーボー（エライ！）も、自転車に乗って帰ってきた。5人で吉野屋「DANA」へ行ってみたが、さすがに人気があって満席。「SANAK」でパダン料理を食べようと、店のなかに入った。定番のコロッケ、アジの唐揚げ、カレー味の魚など、8皿に手をつける。ウブドに着いた頃、あまり食欲がないようだったタッチちゃんもすごくよく食べる。ビンタン4本頼んで、3万4000ルピアだった。夕方、今までの宿代などを精算。帰国組はパッキングを始め、なんだか慌ただしくなってきた。キーボーとメグミがタカシたちの部屋に移ってきて、居残り組の体制を整える。一段落ついたところで、6人揃って最後の「サラマット・ミヌン」。ビンタンで乾杯だ。



大きいワヤンさんが、全員にTシャツをプレゼントしてくれた。6時、空港へ出発。残る3人も見送りについていく。イクちゃんの運転で空港に到着。この空港は、入り口がいきなりチェックイン・カウンターになっているので、居残り組は入れない。まるで新宿の駅前で別れるみたいにあっさりと見送ることになった。空港からの帰り、イクちゃんはクタに回って町の様子を見せてくれた。まるでワイキキかグアム、あるいは真夏の湘南のような賑わいだ。日本の女の子に群がるジゴロ、けばけばしいディスコの看板、KARAOKEのサイン…。ウブドゥと同じ国とは思えない俗っぽさだ。イクちゃんに聞けば、クタではバリの舞踊は見られないとのこと。銀細工の町、木彫りの町、芸術の町、と、エリアによって特色を出しているバリは、クタをジゴロの町に決めてしまったらしい。最初の予定では、クタで食事をするようになっていたが、あまりの喧騒に辟易して、急いでウブドゥに戻ることにした。ウブドゥも立派な観光地だが、やっぱり帰ってくるとホッとする。イクちゃんが連れていってくれた「カフェ・ワヤン」で夕食。入り口は小さいが、階段を降りると広い庭があって、左右にテーブルやタイル張りの座敷がある。自然な感じで木が配され、照明も押さえ気味でいい雰囲気だ。男性はナシチャンプル、私とメグミはパスタを頼んで、サンミゲールで乾杯した(2万9150Rp)。Sehatiに戻り、マディちゃん、小さいワヤンちゃんとセブンブリッジをする。初めてこのゲームをしたというワヤンちゃんは、すごく飲込みがいい。なかなかの勝負師で、なんとチーホーを出した。11時頃、解散。カズはジャワにいる頃だろう。

## ■ 10月12日 (火)

7時半に目が覚める。今朝、雨の音は聞こえない。8時に朝食。泊まっているのは私たちだけなので、テーブルには3人分のカップがセットされている。タカシから貰ったオレンジ色のTシャツを着たイクちゃんと、同じくタカシからのビーサンを履いたマディちゃんに「サラマット・バギ!」。「パパさん帰ってママさんサビシイネ」とマディちゃん。全然平気だよ、みんながいるからね。今日のメニューは、トマトと薄焼き卵、チーズが入ったサンドイッチとフレンチフライ。カズがあらかた荷物を持っていてくれたので、クローゼットがガラガラになっ

た。Tシャツ2枚と下着を洗濯。これだけあれば、残りの日を過ごすのに充分だ。メグミは、昨日約束してきたレッスンをサボって、フロントのティンクリックで練習。右手と左手のリズムの取り方がかなりうまくなってきている。フロントにいと、フランス人のカップル、ドイツ人のオジサン、白人女性の2人連れが次々にチェックインしてきた。今夜やってくるという日本人の女性を迎えれば、Sehatiはまたまたフル回転だ。バリに来てから一番長いウンコが出たとヘンな自慢をしていたキーボーは、シャワーを浴び、鼻毛も切っているんな所をサッパリさせている。お昼になったので、昨日満員で入れなかった「DANA」へ。ここのチャプチャイはトマト味でさっぱり風味。トマトスープもサンバルソースをたっぷり入れるととてもおいしい。オーダーした料理を待つ間、隣のテーブルに座っていた白人の男性が「コンニチワ」と話しかけてきた。少しだけ日本語ができるという彼はオランダ人。半年ほど前まで、ウチの近所の南阿佐ヶ谷に住んでいたということで話が盛り上がる。彼は町田又多摩センターの路上でアクセサリーを売っていたそうだ。でも、日本は景気が悪くなってなかなか品物が売れないし、時々一緒に商売をしていたイラン人が問題を起こして困ったと話す。おまけに、路上の使用料として、ヤクザから月に1万円のショバ代を払わされていたのだそうだ。「東京はどんな所だった?」と聞くと、「面白く暮らすにはお金のかかる町だネ」と顔をしかめていた。東京を出た彼は、韓国、香港、タイ、フィリピン、ジャワなどをフェリーやバス、汽車で乗り継ぎ、バリにたどり着いたとか。しばらくここにいたら、次はスマトラに向かうのだと教えてくれた。「アジアが大好きで、特にタイはいい所だった」という彼は、アイスコーヒーを飲み干した後、店を出ていった。知らない人と、名前も告げずに話ができるのも旅の楽しみだ。それにしても、どこの国に行っても、コミュニケーションのツールは英語なのだ実感させられる。もっと勉強しなくては。ランチの後、メグミと私はイクちゃんに「NEKA 美術館」へ連れていってもらった。丘の上に建つこの美術館には、NEKA氏が集めた内外の画家の絵が展示されている(500Rp)。絵に関しては見るのも書くのも自信がないが、キース・ヘリング風あり、ゴーギャン風あり、ミレー風ありでバリエーションが豊か。

なかには蝦子能取風のものまであって楽しんだ。特に、バリの女性を描いた絵が美しかった。ついでにイクちゃんに、最高級のコテージホテル「クプクバロン」まで連れていってもらおう。入り口にはガードマンもいてなかなか物々しい雰囲気だ。エントランスまでの長い道を通り、テラス風のレストランを見学した。レストランからは、ラフティングで下ったアユン川が見える。点在するコテージとコテージの間隔もゆったりとしていて高級ホテルにふさわしい雰囲気。ここは、ゲスト一人に対して4人のスタッフがつかと。さすがに一晚で Sehati の 10 泊分近い料金を取るだけのことはある。チープでフレンドリーな我が宿に戻って昼寝。3人でヤッチャーをやった後、「THE NOODLES」へ食事に出かけた。メグミが頼んだミアヤムジャムールは、麺のゆで方が悪くてまずかった。この間はおいしかったのに。でも、ウェイターの少年がキュートだから許してしまおう。私はチャプチャイにナシプティを混ぜて、中華丼にして食べた(1万4245Rp)。今夜は、スマララティのダンスを見に行く予定になっている。歩いてクトゥの集会所に行くという私たちに、マディちゃんは暗いからと心配して、友達のニョマンさんに送らせてくれた。日本人は余程ひ弱に見られているのだろうか。キーボーという腕っぶしの強いボディガードがついているから心配ないのに。でもせっかくの好意なので、ニョマンさん夜道を案内してもらった。会場に着くと、日本人の姿が目についた。ユミさんも来ていて、あちこちの人に挨拶している。ウブドゥの母といった感じだ。7時半、メンバーが外から入場して来た。傘を持った4歳くらいの男の子を先頭に、レゴン、トロンボン、パリスなどのダンサーとガムラン奏者が続く。今日はスマララティのスエデン公演のためのプロモーション・ビデオの撮影があるということで、ビデオカメラも入っている。ガムランの演奏が始まった。太鼓の演奏者が手を高く挙げたりして、パフォーマンスも見せてくれる。音色も旋律もどこかセンスアップされている感じだ。特筆モノは、パリスの踊り。バリに来てからこれで3回パリスを見たが、今夜の踊り手、アノム氏には華のようなものが感じられる。ステージに魅き込まれてしまい、カメラのシャッターを押すのも忘れるほどだ。グヌンサリで見た男性が、今日もトロンボンを踊っていた。彼の妖艶な表情はゾクッとするく

らい色っぽい。プログラムより多い演目が見られて、満足して宿に戻った。またまたイクちゃんにわがままを言って、影武者へ送ってもらおう。さっきまでダンスを見ていた日本人のほとんどが集まっている感じだ。なかには、ついさっきウブドゥに着いたばかりという人もいて、ユミさんから「お帰りなさい」なんて言われている。伊藤さんもユミさんも、ウブドゥの素晴らしさを少しでもわかって帰ってもらおうと、色々な情報を旅人に伝えてくれる。ここは、日本人のための情報発信基地のようだ。アラックをライスワインで割って飲みながら、イクちゃんに50音と簡単な漢字を講義。彼はすぐく頭が良くて、勉強熱心だ。英語も堪能だし、フランス語も少し話せるという。本当は、もっともっと日本語を習いたいのだが、家にはまだ妹たちがいるので、自分あまりお金をかけられないのだという話を聞いて、私たちはちょっとシュンとしてしまった。私たちがだって、そんなにリッチではない。それなりの現実が待っている。日本に帰れば仕事が出積みだし、歯医者にだって行かなくちゃいけないし、冬物の整理だってしなければいけない。おまけに訴訟だって抱えている。でも今は、こうしてバリに旅行をし、毎日お酒を飲み、3日後には飛行機で帰って行くのだ。1ヵ月10万ルピアのお給料で家計を助け、結婚のためにお金を貯めようとしているイクちゃんには頭が下がってしまう。伊藤さんが私たちの席にやってきて、明日ウブドゥから30分くらいのパヤンガンでお祭りと教えてくれた。先日チャロナランのダンスを見損なった私たちを気の毒がって、明日は早めに出かけるようにとアドバイスをしてくれる。きちんと正装し、明日の8時にここへ来るように決めて、影武者を出た。11時半頃宿に戻り、1階のテラスでビールを飲みながら3人で珍しく真面目な話をしていたら、あっという間に1時になってしまった。カズが迎えにいったボコリンは元気だろうか。

<つづく>



# アキバ紀行

## 「バグ」ース in 「バリ」

これを書いた時点でタイトルロゴが未定なので手書きです。アキは主人公の名前で「サグアキ」は変更の可能性がありますが、このマンガを講談社の「週刊コミックモーニング」で連載します。

深谷 陽  
FUKAYA AKIRA

本名の「アキ」  
がいます。



大体どんな話かとキーと

25歳のちよといが「一本は日本青年が

放浪して訪れたバリ島と出会った

言葉も通じない美少女に恋をして——という

一言どしちよいばとしかけななですと「ウブドラとか

プリマドン・マス界隈の人とか風景とか、

お店とかが描きこめるので「バリ」の女子学生には

たまにはいいんじゃないかと、あ、でも最初は「バグ」の日常食飯を

ぶんだんに取っ込んだ「超近視眼的な生活ドラマに

したかたんとす4ビ編集部員との話し合いの中で

とちよはきりしたエンタメトラブストーリーになつたあつて

気合の入った「バリ」通の皆さんには物足りなくとキーか

怒られちゃうかもしれないとす4と、まー笑って「ハ、マカジで

読んでいたかたるとしーなと気づきます。

「アキ」的なことをちよといと

「アキ」的なことをちよといと  
伊藤さん由菜さん  
ちよといも変え  
て描かれています

「バリ」のどっかで「僕」にあ  
印象にすぐ残る人は勝手に  
出しちゃうからね。

3/23日発売号で連載開始。

新人の通例で10回連載。

5日中には終わっちゃうけど

よっぽど評判が良かったらそのまま続けた

シリーズ化(他国行った)もありで、

逆に悪ければ途中で切られることもあり、

予定通り10回で終わっちゃう

今年中には一冊の単行本にまとまる予定です



アキ

AKIRA  
FUKAYA

どうかすごく宜しくお願いします

ぐんぐん読者の  
お声かけをのんびり  
読んでいきます



バリ天文教育センター主任講師：青木 満

## 1. アルゴ号冒険物語

4月下旬～5月上旬の夜8時頃、南の空高く、とてつもなく大きな艦船が昇っているのがわかるだろうか。これがかつては全天第一の大きさを誇った「アルゴ座」の雄姿（図1）。アルゴとはギリシャ神話の中の有名な冒険物語に出てくる大船の名前。

その昔、ギリシャのテッサリア地方にイオルコスという国があった。名君の誉れ高いアイソーン王は、臣民の信頼を一身に寄せられ、立派に王たる役目をはたしていたが、ただひとつ、病弱だったことを理由に、義兄のペリアスに王位をだまし取られてしまったのである。まだ幼少だった王子ヤーソンは、ケイロン（いて座）の元に預けられて文武両道を学び、やがて立派に成人し、次期王たる資質を身につけた。

「ヤーソンが成人したあかつきには、王位をヤーソンに返す」との約束が伯父ペリアスとの間で交わされていたのだが、いざその場になったら、言を左右して一向に王位を譲ろうとしない。挙げ句の果てには、「黒海沿岸のコルキス国の宝、金毛の羊の毛皮

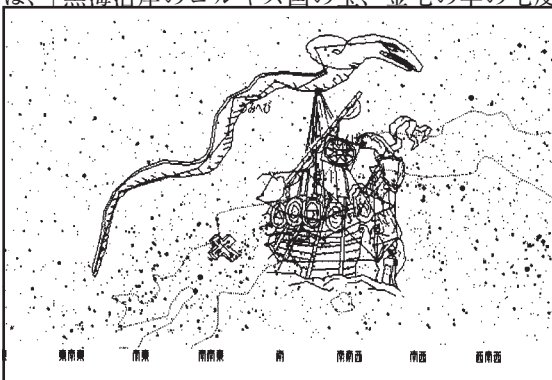
を取ってきたなら王位を渡す。」と、無理難題。

ヤーソンはさっそく、船大工アルゴスに命じて「アルゴ号」という50人乗りで漕ぐ大船をつくらせ、同時にギリシャ全土から50人の英雄豪傑を集め、船の漕ぎ手とした。その顔ぶれはというと、ギリシャ第一の力持ちヘラクレス（ヘラクレス座）、双子の兄弟カストルとポルックス（ふたご座）、半人半牛のミノタウルス退治で名をはせたセーテウス、医神アスクレピオス（へびつかい座）、楽人オルフェウス（こと座）等々、まさにオール・スター・キャスト勢揃いといったところ。

遠征の途中、幾多の難難辛苦の末、コルキスまであと一息というところで、シンプレガーデスの人喰い岩が立ちふさがった。ここは現在のボスポラス海峡にあたり、左右の大岩が絶えず開いたり閉じたりし、その間を船が通ろうものなら、たちまちにして船を押しつぶしてしまうという難所中の難所。

一行はハトを身代わりにたて、ハトが岩に飲み込まれ、次に開いた瞬間に全速力で駆け抜けたのである。しかし、船が後ろ向きに進んだため、あと一歩というところで舳先が人喰い岩にはさまれ、もぎ取られてしまったのだ。（そのため現在に至るまで、アルゴ船の舳先は、星座絵にも描かれていない。）

どうにかこうにかコルキスまでたどり着いたヤーソン一行は、ヤーソンに恋をした魔法使いの王女メディアの助けをかり、金羊毛（おひつじ座）を守る火を噴く竜を眠らせ、無事金羊毛を手にすることができた。多難の航海を終えたアルゴ号は、海神ポセイドンに献上され、後に星座として空に上げられた。



アルゴ船とうみへび

## 2. 星座大小・いまむかし

かつては全天最大を誇ったアルゴ座も、そのあまり





の大きさが災いをなして、いまでは「とも座」、「ほ座」、「らしんばん座」、「りゅうこつ座」の4つの星座に解体されてしまっていることは前回述べたが、これら4つの星座の合計面積は、現在の最大星座である「うみへび座」の、さらに1倍半ほどあったのだから、いかにアルゴ座が並外れて大きな星座であったかが忍ばれる。

では現在の最大星座というと、やはりこのアルゴ船のすぐ上（北）に位置している。見た感じとしては“大きい”というよりは、“やたらに長い”といったところが射ているようだ。その名は「うみへび座」。「名は体を表す」のことわざ通り、道理で長い訳だ。なにしろ、東の地平線から頭をのぞかせてから、しっぽが昇りきるまでに優に6時間はかかるというのだから、並大抵のものではない。

ギリシャ神話では、レルネアの谷に巣くい、口から火を噴く怪物として登場する。その昔、日本でも頭が八つある“八叉の大蛇”とやらがいたそうだが、こちらは一枚上手。頭が九つあったそうで、さしずめ“九叉の大蛇”とでも言ったらよいのだろうか。ところで、春先の宵の空には“大物星座”が、なかでも、上位3位までが勢揃い。第2位はというと、そのすぐお隣の「おとめ座」。農業の女神デーメールと、正義の女神アストライヤーの姿とされ、絶世の美女ではあるものの、全天第2位の大きさの星座だけに、どうしても“ノミの夫婦”とならざるを得ず、よいけなお世話だろうが、そのお相手探しとなると、さぞかし苦労することだろう。

第3位は、今度は北の空をご覧ください。皆さんよくお馴染みの7つの星々が柄杓のかたちを描いている星の並びに気が付かれるだろう。そう、“北斗七星”である。この時期日本では、天頂近くにまで達する北斗七星も、ここバリでは北の地平線を這うように移動（日周運動）していく様子が見て取れるだろう。この北斗七星、あまりに有名になために、

よく星座の名前だと思われている方が多いのだが、本誌 Vol.4 でも述べた通り、星座の名前ではない。この一帯の正式な星座名は「おおぐま座」。

もともとは、美人の誉れ高い天界の妖精カリストが大神ゼウスに見初められたが故に、神妃ヘーラの妬みを買ってしまい、呪いの魔術によって、哀れ熊の姿に変えられてしまった。ゼウスとの間に生まれた一人息子のアルカスとも泣き別れの生活。

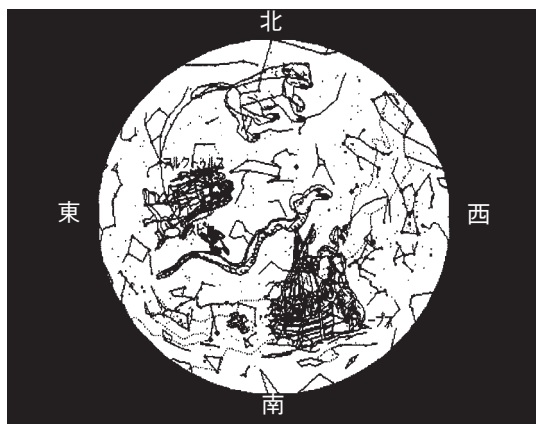
後に、森をさ迷ううちに、別れ別れの愛しきアルカスと再開したカリストは、うれしさのあまり思わずアルカスめがけて叫びながら駆け寄ったところ、何分、熊の姿では、アルカスにはただ大きな熊が飛びかかってきたとしか思えない。狩人として立派に成長したアルカスは、「これはいい獲物だ」とばかりに満月の如く弓を引き、いままさに射止めんとしたところを大神ゼウスが見とがめ、親子共々、熊の姿にして、北の空に上げて星座にしたとされている。ところがこの話には後日談があるのだ。

おかあさん熊の方は、天界でも3本の指に入るほどの大星座。さすがの神様も、星座に上げるときに重すぎて、おいそれとは上がらなかったのである。困り果てたゼウスだが、さんざんばら思案の末、遂に良い方法が思い浮かんだのである。その方法とは、オリンピックにも登場するハンマー投げ。母熊カリストのしっぽをつかんで、力任せにブルンブルンブルン。勢いをつけながら、「えい、やーっ！」と放り投げたところ、うまい具合に天球に張り付いてくれたものの、つかんだ場所が悪かった。勢い余って、しっぽがビヨーンとのびてしまった、とさ。

実はこれと同じ話が、昔からアメリカ・インディアンに伝わっているのである。なんら通信手段のなかった昔のこと。このことから、この話が成立した時分には、ユーラシア大陸とアメリカ大陸とが現在ののアラスカを境に地続き（少なくとも、海面が氷結していたか、低下していたか）であったことがうかがえるのである。一概に、「神話の話だから…」と、一笑に付してしまうことは出来ないものである。

今度は、全天で最も小さな星座を探してみよう。その星座とは、星のことにうとい方でも、その名前だけはまずもって誰もが知っているといってもよいだろう、“南天星座の代表選手”「南十字星」である。ただし、これも正しくは星座の名前とはいえない。正式には、「みなみじゅうじ座」という、あの“サザン・クロス”である。

あまりに有名な星座だけに、まだ実物を見ぬ方は、「さぞかし大きく立派な星座だろう………」と、想像を逞しくするものだが、何を隠そう、実は全天で最も小さな星座なのである。



全天星図（星座ビッグ3）＆春の大曲線から南十字へ



その名の如く、「南の国に行きさえすれば、いつでも夜空に輝いている」かにも思えてくるが、残念ながら、一概にそうともいえない。確かに南天星座に属するものの、星の世界の緯度にあたる“赤緯”がそれほど天の南極（南極天の真上の位置）に近くないため、ちょうど東京辺り<sup>しゅうきょうせい</sup>でながめるカシオペア座のように“周極星”<sup>しゅうきょくせい</sup>とって、一晩中沈むことなく、地平線ギリギリをすり抜けて再び上昇するといった“曲芸飛行”は、ここバリ島辺りでは出来ないのである。オーストラリアのシドニー辺りまで行くと、南十字もついに周極星の仲間入りをして地平線下で休むことが出来ず、一晩中、そして一年中、お座敷がかかるといって、大変に忙しい生活となってしまうのである。

つまりバリ島では、フルーツではないが、「南十字星を見るためのシーズン」というのが生じてしまう。そのシーズンとは、まさに4月下旬から7月下旬頃で、特に5月は“南十字の旬”ともいえ、雨期もすでに明けており、まさに最高の季節といえよう。

全天一小さな星座が、どうしてこのように世間の人気と憧れを誘うかといえは、まず第一に、前述の通り、世界の人口分布の大半を占める北半球中緯度地帯以北ではながめることが出来ないからであろう。人間誰しも、見られないとなると、よけいに見たくなってしまうのが人情というもの。第二に、“星座戦国時代”に創られた宗教に関わる星座（特にキリスト教にまつわるもの）のなかで唯一現存するものであるため、特に欧米での人気は極めて高い。

そして第三に、いや、これが最大の人気の秘訣かもしれないが、最も小さな星座のぶんざいで、全天に21個しかない1等星を2つも抱え込んでいるからであろう。小さな体に2つもの輝星を抱いていたのでは、いやが上にも目だってしまうのが当たり前というもの。南十字の場合、小振りな身体が功を奏したといえよう。だから、同じく近世に創出された“隙間埋め星座”とは、根本的にその存在価値も立場も異なり、ひとまわりも、ふたまわりも大きなそこれらの三流星座などに一歩もひけを取るようなことはないのである。おそらく、この星座を一度ながめると、病みつきになってしまうことだろう。かく言う筆者も、今を去ること12年ほど前に、今世紀最大の“日食騒動”を引き起こした「インドネシア日食」を射止めるため、血気盛んに当時のジャカルタの空の玄関であるハリム国際空港のエプロンに降り立った。その際、残念ながら、辺り一面を包み込んだ濃霧のため、楽しみにしていた南天星座との初顔合わせは、堪能出来なかったものの、天頂付近に仰向けになったサソリ座の一部と、当時そこに位置してい

た木星、そして南の方角の高度30°付近の一帯だけが、わずかながらもやっておらず、いくつかの星々をながめることができた。天空に開かれた限られた窓の中に、明るい星々が織りなす光のクロスを見て取ることができたのである。位置的にもまごうことなく南十字星であることは見てとれたものの、思わず我と我が目を疑ってしまったのである。その姿は、「全天一小さなもの」との頭からの先入観があったことと、日頃プラネタリウムで見なれたものとのギャップがあまりにも大きかったからである。

実際のその姿は、「なんと神々しく、大きなものだろうか」というのが筆者の第一印象であり、クリスマスではない筆者も、思わず頭がたれる思いがしたものである。おそらく、全天の大半が濃霧に包まれ、他に大きさを比較すべく適当な星座が見当たらなかったからと、星座の姿（星座絵）を思い浮かべる際の余白に当たる部分が比較的少ない星座であるために、面積的には確かに全天最小の星座ではあるものの、実際に見た感じとなると、結構大きく立派に感じるのかもしれない。

筆者もこの体験をきっかけに、南十字と皆既日食とインドネシアに一目惚れをし、その8年後には、今度はバリ人女性に恋い思いをしてしまい、翌年結婚。バリでの新たな生活が始まろうとは、まさに神のみぞ知るである。（これは余談であったが……）

このような経緯によって、筆者はひときわこの星座に魅せられてしまっており、いささかエゴひいきが過ぎるかも知れない。しかし、実際にこの南十字の一角が、南天の星空散歩のもっともおいしいエリアでもあるため、当連載に当たっても、ご馳走は最後にとっておいたのである。時期的にも今頃から7月頃までが観望好機でもあるため、今回と次回（最終回）の2回に渡って、これら魅力的な“南天星座の銀座通り”をご紹介します。

### 3. 南十字星の生い立ち

南天の新設星座のひとつであるこの「みなみじゅうじ座」。そのデビューはさぞや華々しいものかという、そうともいえないようである。なぜならば、その初めての登場の時期が、いまだハッキリとしないためなのだ。現在のところ、イギリスの地球儀職人エメリー・モノリーが1592年につくった地球儀に、南十字らしき小さなクロスが、その南半球に描かれているものが最古とされてはいるのだが……。

もう少し不確定なものを含めると、大航海時代のアメリカ・ヴェスプッチや、マゼランの部下のピガフエッタの航海記録にまで時代を遡ることができる

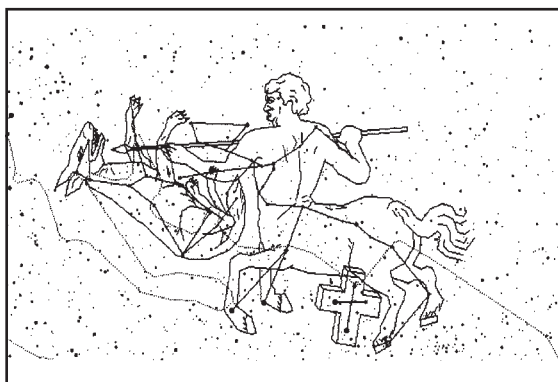


とのことだが、確定的なことはいえないようである。正式に星図にあげられたのは、フランスの天文学者ロワーエによってで、ときは1679年のこととされている。では、それ以前はこの南十字の一角は、いったいどんな星座に見られていたのだろうか。

現在の星座のベースをつくった2世紀の大天文学者、プトレマイオスが活躍した地点アレキサンドリア（北緯約31°）でも、当時は次号で詳述するように「歳差」という現象のため、この南十字星もちゃんと見えていたはず。この狭い範囲に1等星を2つも抱えているわけだから、プトレマイオスたる人が見落とすはずがない。彼は、この南十字をとりまく一帯を半人半馬の怪物ケンタウルスという星座をつくっているのだが、太古の星図には、その後ろ足として南十字が輝いていたのである。つまり当時のケンタウルス座とは、その前後の足に合計4つもの1等星を散りばめた、全天でも最も輝かしい星座だったということになろう。

南十字の独立にともなって、ケンタウルスの栄光はつひえたことになるが、人間の世界のように、独立戦争によって尊い血が流されるといったことが起きないのが、星の世界のすばらしいところといえようか。むしろ、星座の神話の発祥の地ギリシャの人々にとっては、かえって喜ばしいことだったかも知れない。なにしろケンタウルスとは、彼らにとっては悪と恐怖の代名詞のような存在だったからだ。

ギリシャが輝かしい日々を送っていた時代、たびたび北方の地からの外敵の侵入に苦しめられたことがあった。北方の騎馬民族は巧みな手綱裁きで攻め入ってくる。一方ギリシャの人びとは、日頃のどかな農耕社会を営んでいたので、乗馬の心得などハナからない。それどころか当時のギリシャには、まだ馬という生き物すらいなかったために、4本足で駆けめぐる外敵をただただ恐れおののいてながめるばかりで、まったく刃向かうことすらできなかった。



ケンタウルス・南十字星・おおかみ

あまりの恐怖心のために、ついには人間なのか馬なのかの判別すらつかずに、とうとうこのような上半身が人間、下半身が馬という、半人半馬のケンタウルス族をつくり出してしまったそうである。

星座の方でもとても荒々しく、凶暴な存在として恐れられており、星座絵もすぐお隣りの「おおかみ座」を槍で一突きにしている勇ましい姿（図3）で描かれている。東京辺りだと、上半身しか昇ってこないが、隠された下半身にこそ、南十字はじめ、数々の“星界の名所旧跡”が潜んでいるのである。

#### 4. 南十字を探すには、まず北を見よ！

南十字さえ見つければ、そこから南天の珍しい天体や星座、さらには、我々が日本で北斗七星やカシオペヤから北極星を探したように、この南十字から「天の南極」を探して方角を知ることもでき、南半球の人間にとっては、とても重要な存在でもある。

しかし何分、全天一小さな星座なので、ただ闇雲に探したのでは、周囲の大物星座の中に埋もれてしまうかもしれない。ここは焦らず、正統法で行こう。「南十字」という名の如く「南」の空に輝いているのだが、まずは「北」の空をご覧ください。

この時期、夜8時頃には、前述の通り、北の地平線を沿うように、北斗七星の柄杓が伏してある。その柄の部分少しカーブを描いていることがおわかりだろうか。そのカーブをそのまま延ばしていくと、まずオレンジ色の1等星「うしかい座」のアルクトールスに、さらに延ばすと、先ほどの「おとめ座」の1等星スピカに出会う。このカーブを「春の大曲線」と呼び、この名は日本人が名付けたもので、世界的に通用する数少ない星の配列でもある。

そのさらに延長線上には、3～4等星と、少し暗い星々が、いびつな四辺形を作っている。日本では帆掛け船の帆の形に似ているために“帆掛け星”と呼んでいるが、星座では、ウソつき鳥がはりつけにされた「からす座」。どう見てもこれらの星々から鳥の姿は思い浮かばないが、実はこれらの星々は鳥の姿を示したのではなく、はりつけに使った銀の釘の頭とのこと。もっとも“闇夜に鳥”というから仕方ないことだろう。

目的の南十字は、このからす座の真南。天の川の中に輝いている。大きさもからす座にすっぽりと入ってしまうほど。十字架の横軸を東に延ばして、ケンタウルス座の2つの1等星（ $\alpha$ 、 $\beta$ 星）に出会えば、もうしめたもの。それでは南天天体の宝探しに出発進行！（次号「最終回」に続く。）





## ファイト一発！ バリ舞踏

とみた かおり



“異文化体験ツアー”、このありきたりの、ただ南の楽園のパカンスだけでは、終わりそうにない雰囲気  
の漂うツアーに好奇心旺盛な私が飛びついたのは、去年のこと。

ウブド？、レゴン・クラトン？、何の予備知識もなしに此处へやってきて、その晩、生まれて初めて  
レゴン・クラトンを見た。舞っていたのは少女だったが、視線、指先、腰つき、それだけじゅなく、  
全身から優雅な色っぽさを放っていた。

舞うことで、こんなに素敵な表現ができるんだ。すごい、私もこんな風に踊ってみたい。そして、  
翌日から私も、昨夜見たあの踊り子を頭の中に描いて舞ってみる。けれど、私は、ドタバタとはいず  
りまわることしかできなくて、舞ってるなんて言えたもんじゃない。学べば学ぶほど、思う様に動  
かない自分の体に苛立ってきた。噴き出す汗、筋肉も痛くってしょうがない。実際、挑戦してみると  
わかったけど、普段意識することも無い様な体の部分を、曲げたり、真っすぐ伸ばしたりしないとい  
けない。

此処の踊り子は、みんなちっちゃな頃から、毎日毎日厳しい練習をしてきたから、あんなに素敵に舞っ  
ている。私みたいに、付け焼き刃の数回の練習で、できるわけない。1日ひとつでも、ここはいい感  
じに舞えたやんって思えたら、大満足。そう思うと、練習を終えた後の気分はとてもよかった。

もっと学びたいのに、と未練を残して此处を去り、まとまった休暇が取れた途端、やっぱりまた此处  
へ来てしまった。

日本では、忙しく仕事に追われる日々。でも、此处でのバリ舞踏三昧の楽しみが、しんどい毎日に、  
やる気を与えてくれた。わたしにとってバリ舞踏は、ファイト、一発！やる気の素だ。



これ なあ〜んだ?  
**Apa itu?**

みなさん「トーチカ」って知ってますか？

戦争の時に使われたコンクリート製の小型陣地のことです。兵隊が中に入って、壁に開けられた小さな穴から銃の先を出し。的を狙うというものです。今月のコレがその「トーチカ」そっくりなのですよ。戦争を体験した方は、コレを見たとおそらくギョッとしてしまうんじゃないでしょうか。いったいこの正体は何なのでしょう？

**ヒント＝**高さ約 2m、直径

約 2m のコンクリート製。何やら巨大なナベにも見えます。バリの田舎にいくと必ず村に一つは見かける物です。

**解答＝**貯水タンク

PROYEK AIR BERSIH (直訳すると「きれいな水計画」)、おそらくは政府の上水計画による事業だと思うのですが、水道も井戸もない家庭では、川から水をバケツで運んできて洗濯などに使い、炊事に使うのはこの貯水タンクからの水ということが多いようです。

定期的に給水車が来て上のフタを開けて水を補充し、人々は外側についている蛇口から水をもらいます。もちろん無料です。UBUD のプリサルンを北に少し上がったところに以前このタンクがありました。今は上水道も普及し、井戸も掘られ、このタンクは不必要となり取り壊されてしまいました。朝夕、このタンクのまわりでバケツに水を充たしながら井戸端会議に勤しむイブイブの姿も風情があってよいものでした。



Peliharalah Lingkungan UBUD

## UBUD の環境を考える



このコーナーを読んで、UBUD 滞在中の日常の生活排水はどうなっているか気になり、私の泊まっているロスメンの排水口を調べてみました。そしたらなんとびっくり、私のマンディーの排水がそして洗濯のアワアワが部屋の裏の田んぼに流れ込んでいるではないですか！洗剤を含んだ汚水がまさかそのまま田んぼに直行しているとは思いませんでした。日本では下水は人の目にふれることなく、川へそして海へと流れ、直接的な罪悪感を持つことはありませんが、この意外な事実を知ったとき「あっ、申し訳ない！」と思い、どうしたらよいのかアワでふためいてしまいました。

そこで、ささいなことですが、しないよりましだと思い、こんなことを心がけるようにしました。洗剤を使わないことが一番なのですが、そうもいかないで、洗剤の使用量を少なくすることにしました。だいたい日本人は泡がたくさんたっていないと汚れが落ちないような錯覚にとらわれている人が多いようです。洗濯洗剤なんてホントはほんのちょっぴりでいいのです。汚れのひどい部分だけを集中して洗えばいいのです。そしてそのすそぎの時の汚水はトイレの便器に流すようにしました。トイレの排水はバリではもっぱら自然濾過の方法をとっています。4m くらいの深さ、1.5 ～ 2m 四方の大きさの穴を掘り、セメントでフタをしてそこへ流し込むわけです。洗剤に含まれる成分が、どのような影響を自然に与えるのか、詳しくはわかりませんが、現在、UBUD の蛍やタニシや田うなぎやかえるが昔より少なくなってきたことは確かです。

石けん、洗剤のことに詳しい方、どんな製品を使ったらいいのかアドバイスをください。とりあえず今回のキャンペーン・キャッチ・フレーズ。

「洗剤はたくさん使わないようにしましょう！」

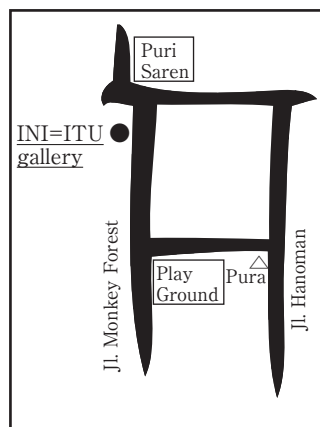


## Toko ◇ BEST 店

### INI=ITU gallery

プリサレンから Jl. モンキーフォレストに入って  
すぐの右側に、2 月初旬にオープンした新しい  
ブティックです。以前ご紹介した「Bali Trend」  
と同じ系列で、クタにもお店があるそうです。  
リゾートウェアにぴったしのレーヨンの涼しげ  
なドレスはシックな色合いが Bagus。麻紐をア  
レンジしたおしゃれなサンダルやキッチン小物  
なんかもありますが、なんといってもここはアクセサリが目玉。少々見  
飽きたシルバーのそのへんに売ってるヤツじゃなくて、ちょっとヨーロッ  
パ前衛風だったりして、なんとなくアートしてます。そして、エスニック  
の香りぶんぶんの“石もの”の品揃えがたぶん UBUD いちばん。マドゥー  
ラから天然石、ガラス細工の石、陶磁器っぽい石、これでもかって感じて  
並べてあって、ゴツめのアクセが好きの人にはたまらないでしょう。さら  
に、そのいろんな種類の大小の石がアクセのパーツとして 1 コ 1 コ売られ  
ているので、自分で好きな石を選んでオリジナルのアクセがつけられるの  
です。シルバーのパーツやピアスの金具、ネックレスの金具もあります。い  
かんせん全体的にお値段もちと mahal なのですが、日本円のレートもここ  
んとこずっといいし、(1 円=22 以上だよ) 夜遅くまで (11:00PM まで)  
OPEN しているのでのぞいてみてね。

JL. Monkey Forest No.8 UBUD BALI Tel 361-96450



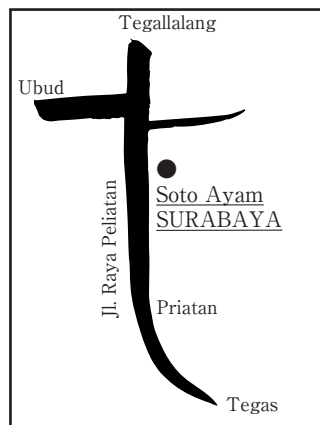
## Warung ◇ 味な店

### SOTO AYAM SURABAYA

インドネシアの代表的なスープとして知られているの  
が SOTO AYAM。

そう、鶏肉の入ったスープです。UBUD のいろんな  
レストランでもメニューにあって、どこで食べてもま  
あまあいしいのですが、いやいやここプリアタンに  
あって地元の人達に人気バツグンの「SOTO AYAM  
SURABAYA」は、ひと味上をいってます。さすが庶  
民の店、職人のワザが生きてる味なのです。メニュー  
は SOTO AYAM と AYAM BAKAR (トリの炭焼き) AYAM GORENG (ト  
リのカラ揚げ) のみ。SOTO は並が Rp.1,000 で鶏肉のササミっぽいところ  
、ゆで卵、はるさが入っています。その他、モツ入りが Rp.1,300。最  
近、パサールで売られている鶏肉は、実はプロイラーっぽくブヨブヨ太っ  
ていてイマイチなのですが、なんとここはね、アヤム・カンブン、直訳す  
ると田舎の鶏…、つまり地鶏を使っているのですよ！食べてみると味が  
全然違います。肉がプリプリして歯応えがあり、う〜んこれぞ地鶏！大  
きさもふつうのときと比べると半分くらいしかなく、よって AYAM BAKAR  
も GORENG も一皿 (Rp.1,750) がなさけないほど小さいのですが、心ゆく  
まで堪能したい方には一匹まるごと (Rp7,000) というのもオススメです。  
小さいから男の子なんかペロリのはず。それにごはん Rp.400、モツ入り  
SOTO、オレンジジュースでも一万ルピアでおつりがきます。SOTO はあっ  
さりしているのにコクがあって、ぜひおすすめする一品です。

JL.RAYA PELIATAN, UBUD BALI



# 私の常宿

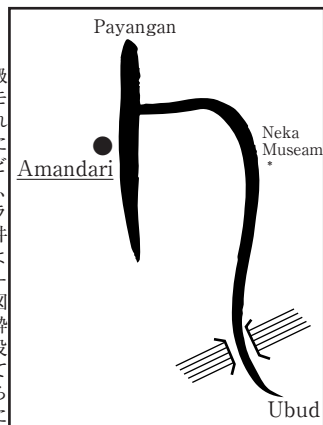
Pondok Manis

## Amandari

銀ちゃん・美貴ちゃん

かげろうの異常発生こまったちゃん事件発生の為、とあるバンガローから夜中超高級ホテルアマンダリへと移動のお陰？で、銀ちゃん・美貴ちゃん珍道中にステキなメモリーまたひとつ。4泊のうち、初日げんなりと疲れ果てた私をごきげんにさせてくれたのは、60cm直径の銀盆に乗った山盛りのウエルカムフルーツとシャンペン。1室に6名程のボーイさんがつくというホテルだけあり、いたれり尽くせりの心憎いサービス。その部屋は15mはあろうかと思われる吹き抜けのワンルーム。床は全て大理石、部屋の広さもとて横10mはかるくあり、回りは庭園で囲まれ、一室一室が100%プライバシーが守られるよう独立したつくりです。キングサイズのベッドに横たわり天井を見ていると吹き抜け造りのせいで、星をつかみそのまま宇宙へさそわれてしまうような気えします。バスルームは庭園内にあり星を見ながらゆったり…シャワールーム、化粧ルームも大理石、全体を写す4m四方のミラーもあります。ホテル内には図書室やCDをレンタルしてくれる部屋もあり、なぜかビートルズなどを聴きバりに酔いしれました。2日目は2F建てへと移動、そこは1Fが広～いリビング。らせん階段を登るとベッドルームになっています。こちらのレストランからは絶景が心を洗ってくれ料理も食器も全て心和むものばかり。さらに夜はプールをへだてて離れたところにバリの楽器で静かに曲をひいてくれる方を淡いライトごしに見ながら優しい涼風にふかれワインをいただくなど最高の気分でした。ここは、レストランだけなら泊まり客ではなくとも利用できるのでアマンダリ気分ちょっぴりひたれますヨ。それに超がつくだけあり、マネージャー、ボーイもマナーはもちろん心をこめて親身になって対応してくれます。とても暖かいスタッフばかり。サイクリングにはミネラルウォーターもついていて、いろんなコースを親切に教えてくださいましたテニスコートもGu!!日本円にして一泊素泊まりで5万円程だから、ちょっぴりがんばってハネムーンの方などびつたりだと思えます。6畳1間のアパートに戻って来てもホテルだけでも1000%満足だったので心は桃色、そして1間のアパートもくふうして楽しく暮らそう…そんなエネルギーでいっぱいにしてくれるステキなアマンダリでした。「私の常宿」ではないけれど、ぜったいオススメのホテルでした。

Kedewatan, Ubud P.O.Box33 Ubud Tel.975333



## Pesan & Kesan

## 旅人一声

梅原 登起子

4度目のバリは特別暑かった。私は南の島が大好きです。理由は簡単。年中夏だからです。初めてバリを訪れたのは2年前。夜のデンパサール空港は夏の夜の匂いがしました。もちろん日本のそれとは少し違う、ねっとりとした甘くしみてくる匂いなのですが、妙に懐しく、それだけで旅情が込み上げてくるような、心地好いものでした。

私がバリへ行く度にかんじることは、他の南の島とは違うということです。バリヒンズーという独特の宗教色が島全体をアヤシク包んでいるのです。バリ人がどこにもアヤシク見えるのもそのせいでしょうか。時々、尾行したくなるようなアヤシイ方に出会うことがあります。きっとオモシロイ所へいけるはずですが、が、いざとなると、ドキドキしてできません。結局、バリの魅力はバリ人にあるのかもしれませんが。私はバリの人達が大好きです。やさしくて、気ままで、したたかでたくましいところ、全てが好きです。

まだしばらく私のバリ通いは続きそうです。



## その他のニュース

### ■理髪店発見！

プリアタンのはずれ、バンジャール・カラーの近くに理髪店を発見しました。店というより小屋と言った方がいいようなほんの3坪ほどのスペースには机とイス、鏡が無造作に置かれ、お客が鏡とにらめっこしていました。ふつうバリの男性達はお父さんや友達に適当に刈ってもらうのですが、それがなかなかの腕前。この理髪小屋のおにいさんもその中のひとりだったのでしょ。最近、美容院はUBUD 近辺にもたくさん開店していますが、理髪小屋は少なく、ここもたいへん繁盛しているようで、順番待ちの人も何人かいました。アーミー・カットなんかもととてもじょうずに仕上がるので、UBUD の警察官ご用達になっています。ちなみにお客ひとりにお値段をたずねたら、Rp.2,500 でした。この値段で男前になれるなら安いもんですね。



### ■アグン・ライ・ミュージアム／野外劇場で初のパフォーマンス！

UBUD の南、ブンゴセカンに現在建設中のアグン・ライ・ミュージアム。その巨大な建物を、こっそり「アグン・ライ城」と呼ぶ人がある。それはさておき、その広大な敷地の一角につくられた野外劇場は、背後にりっぱな割れ門チャンディ・ブントールがそびえ、劇場全体が田んぼに取り囲まれているというすばらしいロケーション。そこで去る2月6日、“TUJU TAKSU”とタイトルをつけたマスク・パフォーマンスが催された。企画そして出演者は、UBUD に長期滞在している欧米人たち。マスの有名なトペン（仮面）彫刻師イダ・バゲス・オカ氏が、特別オーダーを受けて彫ったマスクはバリ風あり、前衛アート風ありのユニークなものばかり。

B.G.M. はシタールやタブラの生演奏と、デッド・カン・ダンスやエンヤなどの曲を使ったコンテンツポラリースタイルで、ダンサーは5人それぞれの個性が出ていて興味深かった。観客約50人が、1時間半のパフォーマンスを楽しんだ。チケットはひとり Rp.10,000 で全額バリの Yayasan ibu sehat bayi sehat (母子健康協会) に寄付されるとのこと。踊りに少々シロウトくさはあったものの、彼らの熱演とその試みに暖かい拍手を送りたい。

### ■ダンドウットは漫才の前座的存在だった？!

日本では女のコ達がチョコレートを買うのに忙しかったであろう2月の初め。バリでは Polisi (警官) がダンドウットのコンサートチケットを売りさばくのに大わらわだった。そう、バリの警察軍 (インドネシアでは警察もアーミーなのだ) が主催するダンドウット・コンサートが、2月11日

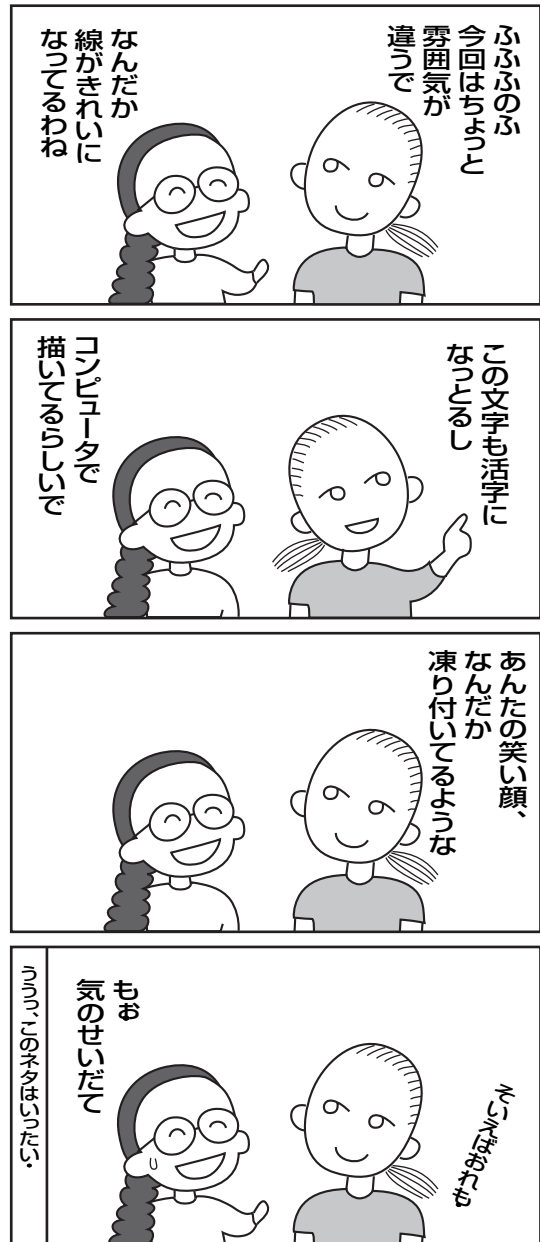


夜、デンパサールのアートセンターで催されたのだ。「これは寄付だから」と言われてむりやり(?)買わされた1枚Rp.20,000のチケットをにぎりしめて、小雨の中、H氏はバイクで観に行った。大観衆の中、制服、私服のPolisiがうろうろ。開演のあいさつも堅苦しく、やっと始まるかと思えばバックのミュージシャンは紫色のジャケットをだらしく着こなした長髪が全然似合っていないオジサン達。こんなバンドは日本の温泉宿にも出ないぞ。オープニングに花火が打ち上げられ、まっていた、腰フリフリネクネのダンドウット・ボーカル嬢。まず2人が2曲づつ歌ったあと、なぜかスーツ姿のカラオケ大好きサラリーマン風が出てきて歌う。そのあと再び可愛いこちゃんが2人2曲づつ。そしてアイ・ジョージ風陽気なオジサンが歌う。まあ、ここまでは許そう。あのスーツ姿はもしかしてPolisiのえらいさんかもしれないし。しかしそのあと始まったのはなんと漫才。延々と30分続く。さあトリはやっぱりダンドウットで!と思いきや、バンドが“それでは～、お別れしましょ～”とエンディングの曲を演奏し、コンサートは無残にも終わる。

雨の中、びしょ濡れでUBUDに帰ってきたH氏は、「ダンドウットと漫才の抱き合わせはよくない」とブツブツ怒っていたのだった。そりゃそうだ。

★★ SPECIAL ♥♥ NEWS ★★  
**BASAR ANRI**  
 BALI の いろいろ 市  
 時 ♥ 1995. 6. 1 ~  
 ところ ♥ ギャラリー 安里  
 知古屋市 千種区 米盛 通  
 1-18 覚王ハイウェイ SUZU  
 問合せ ♥ 052-805-3427

## うぶな人々 その8 ほりり



### 【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、3,000円。おろかし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

| Name                  | Point                                                                  | Address / Tel.                    |               |
|-----------------------|------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|---------------|
| Semara Ratih          | あのスマララティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。<br>宿泊施設有り。                            | Jl. Kajeng 25, Ubud<br>Tel. 96277 | ダンス<br>ミュージック |
| Puri Agung            | プリアタンの王宮でも習えるのだ！<br>宿泊施設有り。                                            | Peliatan                          | ダンス<br>ミュージック |
| Mandara               | 御存知、ティルタサリのご本家。<br>宿泊施設有り。                                             | Peliatan                          | ダンス<br>ミュージック |
| Gunung Merta          | 日本語のできるパノワイダバグース氏が相談にものってくれる。宿泊<br>施設有り。                               | Andon<br>Tel. 975463              | ダンス<br>ミュージック |
| Nata Raja             | STSI 芸術大学出身のワヤン氏は、マルチティーチャー。                                           | Jl. Sugriwa No.20,<br>Ubud        | ダンス<br>ミュージック |
| Wayan Karta           | ガイドのカルタ氏の家族はダンサー・ミュージシャンが粒ぞろい！特にグンマニち<br>ゃんは男性ファンのマドンナです。教え方も上手。       | Jl. Suweta, No.16,<br>Ubud        | ダンス<br>ミュージック |
| Sanggar Centil Cili   | STSI 出身のメンバーを中心に、スタッフもやる気満々。<br>気軽に習えます。                               | Pengosekan, Ubud                  | ダンス<br>ワヤンクリッ |
| Dewa Berata           | あのスマララティのクンダン(名物男)奏者。<br>STSI 出身。お父さんから、4人の兄弟みんな音楽一家。                  | Pengosekan, Ubud                  | ミュージック        |
| Gusti Sana            | Sana 氏独特のカエル百態、ちよっとエッチなタッチ。<br>とてもやさしい先生。                              | Pengosekan, Ubud                  | ペインティング       |
| Budiana               | D. ボウイも持っている、ブディアナ先生の摩訶不思議なエロティッ<br>クなスゴイ絵あなたも描けます。                    | Jl. Hanoman                       | ペインティング       |
| Lantir                | テガスのグヌンジャティの巨匠、パノワランティール氏が秘伝の技を伝<br>えます。                               | Br. Tegas Kanginan<br>No.53       | ミュージック        |
| Rino                  | 一度観たら忘れられないあの Tegas のケチャのワイルドマン、リノさん<br>が教えてくれますよ！ベンパリス Bagus です。      | Br. Tegas Kanginan<br>No.50       | ダンス           |
| Komang Bintang Sarini | プリマレンの花形ダンサーのひとり。とてもいいねいに教えてくれる。<br>練習場完備。                             | Jl. Setra 6<br>Tel. 974645        | ダンス           |
| Mugni & Tutuni        | 上のコマベンタンさんの妹、マグニとトゥトゥニ。<br>プリマレンの若手スター、とっても美人。                         | Jl. Suweta 7                      | ダンス           |
| Puri Saren            | Ubud の王宮に泊まって踊りを習っちゃおう！先生いろいろ紹介してくれます。毎晩<br>敷地内でダンスも観れちゃう。宿泊施設とともバグース。 | Puri Saren, Ubud                  | ダンス           |

でんごんぼん

Pengumuman

### ●使わなくなったワープロありませんか？

どなたか、不要なワープロ、もしくはパソコンを  
お持ちじゃありませんか？編集部の BALI 本部  
では、機器が無い為、今だ手書きで原稿を書い  
ております。Text 出力できるワープロもしくはパ  
ソコンで、出されば私物として BALI に持ち込  
める大きさのモノだとバグースです。どなたか、  
タダで(笑)譲ってください。

お願いします！

<ご連絡は裏表紙の編集部まで…。>

初めてお便りします。「UBUD」の愛読者の 40 才にな  
る男子です。毎回楽しみにしている貴誌の Vol.7 を開  
封して“ビックリギョー天”。懐かしのセゴールを懐  
かしく読もうと思ったら、何と何と見たことのあるイ  
ラストレーションが、ソーニユールされているではあり  
ませんか？私が 4 年前に、由美さんに置き土産にして  
きた私の絵ではありませんか！無断転載です。が、と  
ても嬉しいので感謝しています。あー、あー、もう 2  
年も由美さんイトーさんにお会いしてません。そうい  
えば、私、独立(イラストレーターとして)しました。  
切に切に会いたいです……。ヒラシマミキさんによろ  
しゅう。

イラストの作者：山根聰彦



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi S. / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 小原孝博 / 伊藤博史

カバー絵画：大西有紀 (Apriani)

ロゴデザイン：Hiroko S.

インドネシア語監修：Rianto S.

極楽通信「UBUD」Vol. 8

1995 年 4 月 25 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha  
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,  
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1995 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wighraha Jl.Suweta No.16,  
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102  
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803